
蒼き流星 希望への架け橋

的中青矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き流星 希望への架け橋

【Nコード】

N4094V

【作者名】

的中青矢

【あらすじ】

『ガイア』との激闘から一ヶ月、スバルたちは遂に学生最大の休暇夏休みに突入しようとしていた。今年の夏は平和そうだが、そんな希望を持っていたスバル達の前に現れる1人の少年、覇神黒影。そこから崩れいく平和、憎しみが生み出した新たな戦いに巻き込まれ、スバル達はどうするのだろうか。英雄がいない今、誰も世界を救えない

・(X)話 とある少年少女の過去(前書き)

どうも、的中青矢です。この作品でも注釈を

この作品は前作「蒼き流星」の直接の続編です。恐らく読み進めていくには前作を知らなければいけないでしょう。

しかし面倒だ！ という方はどうぞごり押しで読んでみてくださいも構いません。それとなく説明は加えますのでもしかすれば……まあ、僕の文章力が高ければですが(笑)

では、ここらで注釈を終わらせようと思います。では蒼き流星のURLを

<http://ncode.syosetu.com/n9673i/>

次に本編の外伝、カイが主人公の「風と光と闇の邂逅」を

<http://ncode.syosetu.com/n4233v/>

最後に本編とは別の世界、しかし前作のSSでふれたことのある「あのスバル」の話「蒼き流星 大地の恵み」

<http://ncode.syosetu.com/n4067v/>

以上で紹介を終わらせてもらいます

・(X)話 とある少年少女の過去

four years ago

「……お姉ちゃんが死んじゃったって」

午後十一時、寂しく明かりの灯ったりリビングで母親は小さな愛娘にそう告げた。濡れたような漆黒の黒髪をした愛娘　小学二年生の少女は、悲しい事実を告げる母の目と同じようにその両目を充血させている。

少女には血縁的意味での姉は存在しない。しかしそれに準ずる人がいた。四つ年が上の女の子で、いつも笑顔を振りまいて、過剰なまでに明るい性格をしていた存在。少女にとってそれは小さくない存在で、決して手放したくなかった。

「……なんでも、重い病気に罹っちゃったんだって」

嘘だ、と少女は声を張り上げようとした。しかしそれはすぐにやめる。何故母親が嘘をつくのかを少女が理解したからだ。

大好きだった姉は孤児だった。厳密に言えば幼い頃暴力を振るわれる親から逃げ出し、奇跡的に少女の家までやってきたのだ。それが黒髪の少女が生まれた日でもあるため、少女たちの両親は幼き孤児を養子として引き取った。

しかしいつごろからか、今まで音沙汰の無かった孤児の父親が少女の家にやってきた。理由は明白、孤児の姉を引き取りに来たのだ。少女の母親は必死に姉からその情報を隠したが、気づかれないわけが無かった。自分の父親が来て、迷惑をかけていることを知った姉は、ついに自ら元の家へと戻っていった。それが運のつきでもあ

った。

元の家へと戻っていった姉はまた暴力を振るわれて息をしなくなった。それが分かったのが死後一週間経ってから。遺体は近くの公園へと捨てられていた。不運な通行者がそれを見つけサテラポリスへ通報。今さつき少女の家へと連絡が回ってきたのだ。

普通なら少女の入り込む余地などないのだが、少女は賢すぎた。もしかしたら姉が死ぬかもしれない漠然と予想していたし、死ぬなら病氣なんかで死ぬのではなく、他の理由で死ぬと知っていた。姉がたまに昔のことを語っていたのを、脳に焼き付けていたからだろう。結果として少女は姉の重い死の本当の理由を知ってしまったのだ。

「お姉ちゃん、可哀想だね」

「……うん」

いつかは来ると予想していた死、しかし実際来てみるとその衝撃は重すぎる。若干八歳の少女が受け止められないであろう痛みに、声を出さずにいるだけでも感嘆に値するだろう。

「……お母さん」

「……何？」

「お花を摘みにいこう？」

その提案に一瞬断ろうと母親はした。時間が時間だけに、小学二年生がこんな時間に外を歩くことはいいことではない。不審者でも現れたら母親は守れる気がしない。せめてわが子は守るつもりだが、それでも危険なことには変わりない。

だが我が子のしつとりと濡れつつも強い意志が込められた瞳に観念し、母は了解した。公園までは一分もかからない。すぐに行つて帰ってくればいい話だ。

深夜の道路を電波によって作られた街頭が虚しく照らす。遠くを見れば通行する自動車が見えるが、七時などに比べると断然少ないように見える。

季節は春だが、深夜ということもあって相当冷え込んでいる。何か上着を持って来ればよかった、と母親は思ったがしかし後の祭りだ。それに我が子が何も言わずにただ歩いているのを見てみると、何だかそんなことも馬鹿らしく感じられてきた。

寒さを我慢してただ歩くと、すぐに公園には着いた。誰もいない貸切の公園はこんなにも寂しいものなのか、少女はそう思いながら目的のものを探し始める。

この時代自然のものというのはほとんど無くなってしまったが、公園などのものには配慮して雑草などは適度に残されている。一応自然は残っている、などといえるからであろう。どこの国でもどの時代でも浅ましい考えを持つ人間は多いのだ。

「見つかった？」

街頭の届かないところまで探していた母は我が子に訊いた。しかし少女は首を横に振る。花はいくつかあるのだが、少女がその花に納得しない。何を探しているのか訊こうと母はしたが、しかし訊ける雰囲気でもなかった。

ふと母は、娘が少し大人びているのだと気づいた。この年頃の子供だったら大声で笑ったり泣いたり物をぶったりけったりするのが普通だ。しかしそれを我が子はしない。他人の迷惑にかからないようにし、自分にとって悲しいことがあっても他人には打ち明けない中学生のようだ。

だがそれも仕方ないことなのかもしれない。その母の夫が病院の若き院長だ。病院のことを知っている我が子は、自然と気遣いとい

うものを早く「身につけてしまった」のかもしれない。そのせいで友達との精神的な隔たりが起き、友達が少ない。

いい子すぎるのも問題か。

そう教育してきたのは事実だが、母親がしたのはそこまで強いものではない。しかし環境のせいで育ち過ぎてしまった。たった八年で倍以上の年齢の精神まで上り詰めてしまうほどに。

それでいいのだろうか。精神的に成長出来るのはとてもいいことで、一見問題ないように思える。しかし何もないのか？

「見つかった」

我が子のことと頭を一杯にしていた母は、その声ではっと我に返る。見れば愛娘が泥だらけの手でたんぽぽを掴んでいた。何枚もの花びらが重なった黄色の輪、小さくてどこにでもあり、しかしそれでいて美しい花。

別に明日の朝でも問題は無かった。もしかしたら少女の持つぼろぼろのたんぽぽよりもいいものが見つかったかもしれない。だが少女は今日に限った。

「これで、お姉ちゃんもたんぽぽを見て天国にいけるね」

その言葉に母は少し呆然とし、それから涙と共に苦笑した。我が子に四十九日というものを教えていなかったという反省とそんなにも我が子は優しくかったのかという感動。それを現すには周りに変と思われるかもしれない表情をしなければ無理だった。

「うん、きつとお姉ちゃんはのたんぽぽを見られるよ」

涙と共に母は我が子を抱きしめた。小さな小さなその体も小刻みに震えている。さっきまで聞こえなかった嗚咽も鼓膜を揺さぶる。

そして母は知った。優しさはほかの子よりもあるけれど、心の強さは大して変わらないのだと。

「ねえ、お母さん」

ママと呼ばなくなったのはいつからか、と思いつながら母は我が子の話に耳を傾ける。

「お姉ちゃんみたいなのは、ニホンにもたくさんいるんでしょ？」

「……ええ、そうよ」

「でも、救ってあげる人は全然いないんでしょ？」

『姉』も、もしかしたら他の誰かに再度拾われることがあったなら死ぬことはなかった。しかしそんな奇跡みたいなことは有り得ない。。結局、他人の子供を救う人など皆無だ。だったら、それをし上げてくれる人がやるべきなのだ。

「私、もっとたくさんの人を救いたい」

病院では多くの人が死んでいく。発達しすぎた時代においても、未だ新種の病気のせいで命を落とす人が後を絶たない。多くの死者は老人だが、栄養を充分に取れず死んでしまう子供も近年問題視されているのも事実だ。

発達しすぎた世界では命も軽視されるようになってきた。子供なんて、ペットと同じと考える大人も今では少なくない。どこかの先進国でも子供人体実験に使うなんてとんでもないニュースもあったのだ。

「それはいい願ひね」

だから我が子のその決断に母は答えようとした。

「お母さんも、それに賛成だわ」

救われていない子供を救う、小さな少女の夢を母は叶えようとした。そして二カ月後、その夢はすぐに実現することになる。十数人という「救われなかったかもしれない命」はこうして救われることとなり、その二年後には捨てられた命も救われた。

しかし、それが少女にいい影響を与えたかというところではなく、結果として人間としての成長を早めることとなってしまったのは、また別の話だ。

two years ago

「……おまえはいつか俺と戦うことになる」

赤髪をした少年が、勝ち誇った笑みと共にそう告げた。少年の身長はそのころはまだ一五センチもなく筋肉もそれほど無い。しかし他者とは比べ物にならない才能が、少年に圧倒的な強さを与えていた。

そしてそんな才能の塊に敗れたもう一人の少年は赤髪の少年を殺意のこもった両目で見つめていた。しかし彼らは殺し合いなどといった物騒なことをしていたわけではなく、小学生として普通の生活を送っていただけである。敗れた少年の目が異常なのは、負けるはずの無かった戦いに負けてとても悔しかったからだ。

だから敗れた少年は自分が負けた相手の台詞が、来年また戦うからそれまでに強くなっている、という意味だと捉えていた。なので

次は絶対に負けなれないと思いつながら見つめているのだ。

しかし赤髪の少年はそんな意図で言っているわけではない。

「場所はどこか分からない。もしかしたらニホンかもしれないし、アメロツパかもしれない。シャー口かもしれない。だけど、おまえと俺はまた戦う。これは宿命だ。1%の例外も無い。どちらかが戦う前に死ぬなんてこともない」

赤髪の少年が何を言っているのかはいまいち分からないけれど、しかし敗北者はどのみち戦うことは知っていた。自分たちがやりあった競技でいづれ戦うことは、敗北者自身が望んでいたことだ。来年こそはこいつを倒す、そして優勝してみせると。

「でもだ、もしかしたらその戦いでどちらかが死ぬ可能性は充分ある。頭を刎ねられて死ぬか、心臓を貫かれて死ぬか、それは分からない。分からないぜ？ 教えられていないもの。だからこれだけは言うておく。おまえも覚悟しておけと」

愉快そうに笑う赤髪の少年に、敗北した少年は一応頷いた。それが礼儀だと思っていたし、今日の前にいる目立った風貌をする少年が来年も余裕の笑みを浮かべて戦うことは、容易に想像出来た。だから自分が勝って相手に参りましたと礼をさせることが目標になっていたのだ。

「じゃあな。言いたいことはそれだけだ。また会おうぜ。……いつ会うかは分からないけど」

縦長の袋と旅行用のバッグのようなものを持ち上げ、赤髪の少年は踵を返し会場から去っていった。その後姿を脳に最後まで焼付け、敗北した少年の今年の大会は幕を下ろした。彼にとっては不本意で

仕方の無い大会ではあったが、課題が発見できたわけでもある。しぶしぶながらも少年は今回の大会にも意義があると思っていた。

「ああ、いたのね」

優しい声が聞こえ、振り返ってみるとそこには少年の両親がいた。前日に絶対優勝してみせると豪語していただけに、負けた恥に少年は顔を紅くすることは無く逆に蒼くした。負けることに恥じているわけではないが、負けた瞬間を勝利を誓った人たちに見られたことがたまらなく嫌だったのだ。

「負けたからって来年があるじゃないか」

「そうよ。負けた悔しさをバネにすればきっと来年は優勝できるわ」

両親の言葉が自分を傷つけないように選ばれていることは、小学四年生ながらも少年は知っていた。彼が負けた試合は惜しくもなんともしない試合で、完封負けであったのだ。素人がそれを見て来年も勝てるなどと思えるはずが無い。

「……うん、がんばるよ」

しかしそれでいいとも思っていた。両親が自分を本気で応援してくれていることは少年は骨身に染みて分かっていった。来年は無理でも再来年くらいなら勝てるかも、と思ってくれているかもしれない。

「俺、今度は負けないから。絶対に勝つから」

負けた試合を何度も何度も脳内で反芻しながら少年は誓いの言葉を並べていく。それがどんな意味を持つかは少年自身には分からなかったが、とにかく口を動かして痛かった。何故なら負けた試合の

悔しさで、今まで溜めていた涙を流してしまうかもしれないから。

「本当に、負け、ないから……」

そして涙をゆつくりと流し始めた喋るわが子に、母親はゆつくりと抱きしめた。わが子がどれほどまで悔しい思いをしたか、分からない両親ではない。だから彼らも我が子のためにがんばっていきつもりであった。

それがある少年の、6月の出来事であった。そのときの少年は次の一年間はただ厳しい練習に打ち込むだけの人生が待っているのだと、本気で思っていた。笑って泣いて、喜んで悔しがつて、そんな生活だけが待っていると本気で思っていた。

しかし翌年の6月、勝利を誓った少年は現れなかった。練習のし過ぎで体が壊れたとか、そんなことではない。ただ去年の大会に少年の家に強盗が入り込み、それを少年が殺してしまったというだけのこと。少年の両親が少年に絶望し、少年を捨てたというだけのこと。

そして少年は理解する。自分の両親は自分を愛していたわけではなく、理想に忠実な子供を愛していたのだと。自分は偶像に過ぎず、理想で無くなった偶像は捨てられたのだと。

こうして少年の未来は決まってしまった。変わりようもないレールが敷かれてしまった。だが一番致命的なのは、少年がそのレールを真っ直ぐに歩むことを決め、それが正しいのだと思い込んだことだった。

t h i s y e a r

『ソソソソ……』

ここはニホンのどこかにある電脳。そこに約50体のヒールウィザードが集まっていた。

『集まった、ようやく集まったぞ！ こんだけいればストロングだつてぶちのめせる……！！』

リーダー格と思わしきウィザードが抑えられない笑いをこぼし仲間を見渡した。これだけのウィザードが集まるのはもはや感激さえ生まれる。

ここに集まったほとんどのウィザードは以前ストロングにやられたウィザード達だ。その復習のために今日ここに集まってきた。余程恨みがあるのだろうか。仲間とどうやっていたぶつて殺そうかなどと物騒なことを話し合っている。

リーダー格のウィザードは静かにしると言った。それに従い全ウィザードがリーダーへと目を向ける。

『いいか、今日俺たちはあのにつくきストロングをぶち殺す！ そしてここシーサーアイランドに大量のウィルスを持ち込んで、破滅に追いやつてやるのだ！』

『『『『『『『『『『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおつつつつつつ！』』』』』』』』』』』』

50体の雄たけびが電脳を揺らす。端から見ればなんだこの悪役丸出しの奴らとは鼻で笑うかもしれない。しかし彼らにはそれだけに必要な力も兵力も備わっていた。笑い事ではすまない。

『住民を10人くらい人質に取れ！ そうしたらあいつも無理に手だしすることもねえ……・そして何故だか知らねえが、あいつは3

日前に何かの戦いに巻き込まれて負傷もしている。これで俺たちが負けるわけがねえ！ いいか？ 怖気づくな。今日のストロングは絶対に倒せる相手だ！！』

何故ストロングが負傷しているか。それはディーラーというこのとき存在していた電波犯罪組織によって洗脳され、それから星河スバルことロックマンと戦い敗れたからだ。この事件はあまりおおよげに発表されていないのでヒールウィザード達は知らなかったのかもしれない。

『……さて、たしか俺たちがここを出るのは10分後の予定だったな。しかしもう待つてられねえ。今すぐいつちまつか！』

リーダーのその獰猛な発言に数十体が苦笑する。しかし誰も止めるものはいない。奴らもすぐにでもストロングを殺してしまいのだ。

『じゃあ行くぞ！ 遅れをとるな！ あいつの死に様を　ん？』

すぐにサイバーアウトしてシーサーアイランドに向かうはずだったリーダーだが、そこでふと動きを止めた。それについてきた50体の動きも止まる。

リーダーが止まったのは、たった2体のウィザードが動かなかつたからだ。いや、厳密に言えば片方の様子がおかしかったのだ。どつおかしかったといえ、何故か腰を境目に上半身と下半身が分裂しているから。

『ぎゃああああああああああつ！』

さっきまで雄たけびを上げていた電脳には不釣合いすぎるほどの悲鳴。断末魔を上げた哀れなウィザードは断面から粒子を零しながら

ら、ゆっくりと消えていった。

ただごとではないと思った50体のウィザードは各々の武器を構えた。

『……………てめえ！』

怒りを孕んだ声をリーダーは仲間殺しをしたウィザードへと向ける。

そのウィザードはなんとも奇妙な格好をしていた。蝙蝠を模倣したかのような頭部に自身の身体をすっぽりと覆いかぶすベージュ色のマント、何より真紅に染まった瞳がそのウィザードの異常さを物語っていた。

『てめえ、何故殺した……………！』

その問いにウィザードは面倒くさそうに、しかしあくまでも律儀に答えた。

『……………おまえらが俺の獲物だからだ』

その言葉にリーダーは思わずしたうちをする。これほどの数が集まればそれほど情報が漏れる可能性も否定できるわけが無かった。だからサテラポリスのスパイがもぐりこんでいても不思議ではない。

『サテラポリスのスパイってところか……………。ふぎげやがって！』

『……………サテラポリスのスパイなんかではない』

その言葉にリーダーは眉をひそめた。サテラポリスのスパイではないというならば、何故ここで裏切るようなまねを？

『俺はただ殺したいんだ。何かを殺していないと気がすまない。そこでちょうどおまえらが50体も集まってくれたからこうして出てきたというわけだ』

『ああ……？ 意味分からねえぞ』

『意味など分かる必要が無い』

そういつてマントのウィザードは右手を紫色のソードへと変形させる。

『……意味が分からねえが、とにかくてめえはここで殺す！ こっちは50体いるんだ！ てめえ一人で勝てるわけがねえ！』

リーダーのその言葉を皮切りに50体のウィザードがいつせいに突っ込んでいく。ストロングを倒せるかもしれない力と兵力をかね合わせた軍団、それは経った1体の電波体をあっけなくデリートさせる。

『邪魔だ』

たった一振り、たった一振りだ。マントのウィザードが行ったのは剣を真横に一閃させただけ。にも関わらず一気に5体のウィザードが分断され、デリートされていった。

『……たしか、予定では10分後にはここから出るつもりだったらしいな。なら、俺の予定はそれまでにおまえを全て殺すことだ……』

かくして、誰にも目を向けられない電脳で殺し合いが起こった。いやそれは弱いもの苛めというにもあまりにも不憫な戦いだ。子供が蟻を踏み潰しまくると同じようなものと考えれば、想像しやすいかもしれない。

「さ、これで帰るか」

笑みを浮かべながらハンターを見つめる1人の少年。黒に近い紫色の髪をした少年はこれから何も用が無いのか、ウェーブライナーのほうへと歩いていった。

「ま、どうせ暇つぶしだからね。……あいつの気がまぎればいいでしょ」

そういつて『今までに一度も乗ったことの無い』ウェーブライナーの駅へと辿り着いた少年は、これもまたこんなに硬い椅子を座ったこともないとはかりに身長に椅子に座った。

「痛いな。もう少し柔らかくすればいいのに。せめて羽毛くらい欲しいな」

駅でそんなことを愚痴るな、といわれてしまいそうな少年。しかし珍しいことに今日はもうシーサーアイランド駅にいる人間はほぼ皆無だった。それもそのはず、ここでロックマンが戦えばそうなる。

「さて、現在午後四時。なんとか門限は守れるかな？」

無邪気な笑みを浮かべながら、少年は乗ったことも無いウェーブライナーを待つ。今日このとき、50体のウィザードが悲鳴を上げていることを知りながら。

・(X)話 とある少年少女の過去(後書き)

感想はいつでも書いてもらって結構です。このサイトのユーザーの方でない人でもかけるので、もしよろしければ書いてください！それが私の励みとなります！

・(X-1)話 スバルがいなかったとき

スバルがこの時代に戻ってきた頃

「……これはどういうことかしら」

差し出された資料を見ながら、老婆　ヨイリー憤った。資料を持つ手がぶるぶると震えている。射殺すかのような視線を送っている先には、1人の茶色い髪をした若き科学者が優雅に椅子に座っていた。

ヨイリー達がいるのはWAXA・二ホン支部だ。今日は『ある一件』で二ホン支部とアメリッパ支部が内密に話し合いをしていた。それも大掛かりな。両支部の最高責任者級の人間がこちらに出向いている。しかも友好的な表情を誰もが見せない。そこにあるのは愛想笑いか失笑、策謀と読み合いだけだった。

「どうもこうも、それが真実だということですよヨイリー博士」

茶髪の科学者　ギーラが紅い瞳をヨイリーに向けながら言う。
その笑みは癡猛という言葉が似合っていて肉食獣を彷彿とさせる。

「私たちアメリッパ支部がこの二ホン支部に「クロックPGMの被験体になってくれるウィザードはいるか？」と申し出たところその暁君がクラークを寄越してくださったんですよ」

「……そうなのか？　暁君」

二ホン支部長官が重々しそうにそう暁に訊いた。護衛としてやってきた暁だが、しかしこの場で彼は重要人物でもあった。何故なら『ある一件』に深く関わっているからだ。

その『ある一件』というのは他でもない。暴走したクロックマンについてだ。

資料にはクラークにクロックPGMを装備させたところクラークが突然変異。人型にさらに近くなったそれをクロックマンと名づけ実験を数週間実行していた。しかし突如謎の電波体　シルバー・ウインドがアメロツパ支部を強襲、それに伴いクロックマンも逃亡、以後二ホンにやってきてハープ・ノートを誘拐、それから200年前へと跳んだ。

それからアメロツパ支部の調べによってクロックマンは200年前にロツクマンエグゼによって倒されたことが確認。またこの時代にもクロックマンの影響がないことを考えるとクロックマンを過去で倒されたことがほぼ確実と断定された。

事件は終わった。しかし、それだけでは大人の世界では話は終わらない。

「……はい、そうです」

暁はゆっくりとその質問に返答した。顔を下げ、申し訳なさそうに言う彼の姿をスバルたちが見たらなんとというだろうか。

「ほらね？　言ったでしょう？　暁君が悪い。てつきり暁君が全てをあなたがたにこちらは知らせていると思いましたがよ……」

余裕の笑みを浮かべるギーラ、その笑みにヨイリーは舌打ちをしそうになった。

このギーラという科学者には悪い噂が絶えない。特に人体実験のことに關しては多かった。裏では子供を誘拐して電波人間の強化に

使っているのではないかと。

そう、このギーラは電波人間に関しては世界でも郡を抜いている科学者でもある。約160年前から続いている電波人間の研究を飛躍的に向上させたのは他でもない彼だ。もちろん、あのアシッド・エースを作ったのも彼の力の大部分を借りている。

それほどの人物を敵に回したのがヨイリーや長官には怖かった。実際アメロツパ支部長官がしようが、ギーラが一番権力を持っていた。やろうと思えば彼が二ホン支部を襲わせることも出来るのだ。

「まあ『よくあるミス』でしょう、伝達ミスなんて。データではなく声ですからね。仕方ないことですよ」

皮肉を言われた二ホン陣営だが、ギーラのいうとおりであった。これは二ホン陣営のミス、それはゆるぎない物だった。

「……しかし、何故世間一般に発表しなかったのです？　まずは研究が一度完成したのですから」

「そんなの良く考えてみれば分かるでしょ？　私たちが完成させたのは『時空間制御』です。それがどんな意味を持つか、お分かりでしょ？　そしてもしそんな技術を持っていると知られればどこからハッキングされるかも分からない。シャークやチヨイナなんてそれこそ我々の技術を狙うために何でもしてきますからね」

あ、これは言っちゃ駄目なんだった。今のは無かったことに。そう付け足すギーラの目はどこまでも『黒く澄んだ』笑みを顔に貼り付けたままだ。質問をした長官も油断ならない敵だと再度気を引き締める。

「……というか、今回の件では元を辿ればシルバー・ウィンドという電波体のせいではないですか」

ざわりと場が騒がしくなる。圧倒的攻撃力と誰も寄せ付けない防御力、それを兼ね備えた謎の電波体、その話題に触れるということは……誰もがすぐに予想できたことだ。

「だったらその電波体を我々アメロツパ支部は許すことは出来ません。つまり粛清したいんですよ」
「待ってくださいッ」

そう叫んだのはヨイリーだった。

「あの電波体はヘイトと敵対していた電波体でもあります。まだ我々の敵かどうかは」

「あなたがたにとつては味方かもしれない？ ならあなたがたは敵だ。あの電波体は私たちにとつて敵だから」

「ですからまだ意見を出すのは早急だと……！ それに分かっているのでは？ 彼がいなければクロックマンは過去にいかなかった。つまりあの電波体があったことは世界を守ったということなのでしょ……！」

仮にクロックマンが暴走して過去にいかなければ過去が変わってしまったということだ。つまりこの世界が消えてしまったかもしれないということ。

「あの電波体がやっていることは、遠まわしに世界を救っていることなのかもしれません……！」
「それは違いますね」

しかしあくまでギーラはきっぱりと否定した。

「仮にシルバー・ウィンドがアメロツパ支部を強襲しなければ、クロックマンは暴走しなかったと思います？ ……違いますよ、『暴走します』。過去が存在している時点で未来も決まっているということなのですよ。いや違うか？ クロックマンにとっては暴走したことが過去でクロックマンエグゼに倒されたのが未来だったのですから」

一瞬頭を混乱させてしまうのではないかというギーラの表現。ようやくくすれば「クロックマンが200年前で倒された」という過去があるならば現代に「クロックマンが暴走して200年前へいくこと」はどうしても決まっていたということなのだ。

「……なら最初から問題にはならないのでは？ アメロツパ支部がああなることも確定していたのかもしれないんだから」

「いえいえ、私たちにとって許せないのは他の事で」

「他のこと？」

ええ、とにっこりと笑うギーラ

「私たちが作り上げたクロックPGM、それが奪われてしまっておりまして」

「……ッ！」

場が凍りついた。アメロツパの精力を注ぎ込んだクロックPGMの紛失、それは絶対になってはいけないことだった。

「クロックマンが持ち去った可能性も捨て切れませんでした、シルバー・ウィンドの反抗だと確認されました。監視カメラにも映っていました」

そういつて証拠だとばかりに各々のハンターにデータが配信される。そこに映りだされたのは紛れも無いシルバー・ウィンドの姿で、何かのパソコンを操作しているようだった。

「だから許せないというわけです。私個人もあの研究を無にされたのはとてもいたい……。これは1人の研究者としてでもです」

「……しかし、それが何の問題なのです？ 過去に戻ったところであなたの理論なら世界は安泰」
「言ってませんでしたか？ クロックPGMは『未来』にも跳べたのですよ」

愕然となる科学者たち、みな顔色が真っ青だ。

未来に行けるといふ事は、可能性としてシルバー・ウィンドが未来で世界を破滅に追いやっている可能性も0ではないのだ。過去は決まっただけでも、未来は不確定要素なのだからその可能性は捨てきれない。

「故に事態は一刻も争う。……お分かりですか？ シルバー・ウィンドは危険すぎるのですよ」

今度こそヨイリーは反論しなかった。材料も無いが、ヨイリーもシルバー・ウィンドに対して危機感を持っていたからだ。あれほどの能力を持った電波体が未来に行けばどうなるか、想像するだけで身が凍るほどだ。

「 1月後」

ギーラは呟いた。

「1月後に私たちはここニホンに改めてきます。そのときはアメロ

ツパ最高戦力をそろえてやってきます。もちろん、ニホン支部も協力をしてくださりますね？」

頷かざるを得なかった。ここにいる人間全てが合意した。ある一人を除いて。

そのことにギーラは気づいていたが無視をした。どうせ多数決の世界である。1人が頷かなかっただけで何かが変わるわけではない。それに欲しかったのは「ニホン支部の了解」だけだったのだから。

「では私たちは帰国します。ニホンの方々も私たちに最大限の協力をお願いします」

最後にとびきりの笑みを浮かべてアメロツパ支部の面々は起立した。あくまでニホン陣営は接待をしていただけといわれてもおおしくない。そうなるはずだった。

「ギーラ博士」

暁がギーラを呼び止めるまでは。

「……はい？」

最後に部屋から出て行くところとするギーラはゆっくりと振り返った。その先にいる暁に視線を向ける。2人の若き青年が視線を交えることに、一体どんな意味があったのだろうか。

「あなたはムーメタルというものをご存知ですか？」

「……ええ、一応聞いたことくらいは。たしかムー族が作り上げた最強の電波兵器だとか」

「それを持っているのがシルバー・ウィンドです」

その言葉に一瞬眉をひそめた。

「なるほど……つまりもつと未来が危ないと」

「……あなたはムーメタルの力を知っていますか？」

「ええ、何しろそちらが『専攻』ですから」

最後の最後でニホン陣営がどよめいた。『専攻』、つまり専門に研究しているということだ。電波人間のほかに。

さつきとは違ついいようにざわつきが起こるが、しかし暁は淡々と問いかける。

「ではムーメタルの4つの能力をいえますか？」

「1つ目はムー族の強化、2つ目はコピー……増幅能力、3つ目は異次元移動。ここまでは」

「4つ目は時空間移動」

その言葉に長官とヨイリーはあつと声を上げた。

「最初から知っていたでしょう？ つまりシルバー・ウィンドは元々持っていた。なのに何故奪う必要があったのですか？ ……ただ消しただけでは？」

「何故？」

「あなた方に時空間移動をさせないため」

暁のその言葉にギーラはにっこりと笑った。その笑みはこれまでのどの笑みよりも感情的で、怒りを含んでいた。

「面白い仮説です」

そういつて部屋から出て行った。最後に暁が見たのは、何の表情も映していないギーラの横顔だった。それが意味するのは、つまりギーラは最初から笑ってなどいなかったということだ。

- (X-1) 話 スバルがいなかったとき (後書き)

感想お待ちしております！

・(X・2)話　うちの魔王様は強引です

「……ねえ、スバルくん」

「ん、何委員長？」

昼休みのコダマ小学校でスバルは机の上で昼寝をしようとしていた。給食を食べたあとということでおなかもふくれ眠気も増す。彼がロックマンだろうとそれは変わらないのだ。

「あなた、今の季節がどんなのか分かっている？」

「え……そりゃ夏に決まっているじゃないか」

さんさんと光る太陽を視界の端で確認しながらスバルは答える。

そう、彼らは今夏に突入したのだ。海や山などの大自然に囲まれる生活をする人も多いこの季節。

「あと一週間で夏休みなのよ？　それなのに何でこんなぐつたりとしているの？」

どうやらルナは夏休み前なのになんでスバルは元気が無いのだと聞いたらしい。けれどそんなのは決まっている。夏休み前のテストがさっきの授業で返されたからだ。

「いいじゃん寝ていても……へこませてよ」

「へこんで何かが変わるんだっいたら誰も苦労しないわ」

「そうだぜスバル。へこむなよ」

横から口を出してきたのは大柄な少年、牛島ゴンタだ。彼の成績は著しくなく、きつと今回もテストも悪かったはずだ。なのにその

顔は落ち込んでいる様子がない。それよりも明日から授業が短縮だやっほーいと喜んでいる。

「……人生が紙切れ数枚で決まっちゃうこの世の中がおかしいんだ。俺達は悪くない」

「なにいつているのゴンタ。そんなことあなたにはいわれても誰も嬉しくないわ」

格好良く言っ たつもりがルナに反撃を喰らってしまっ た。やはりゴンタもテストが悪かったらしかつた。漢字テストが一番酷かったらしく今日の放課後再テストだとも言っている。しかしへこんでいるようすはない。さすがだ。

「ま、大丈夫ですよスバル君。一学期の成績が悪くても、二学期取り返せば問題ありません」

そう安心させようとするのはキザマロだ。彼のほころんだ顔からしていい点数は取れたらしい。たしか数学のテストはルナについて学年で二位らしい。その成果が報われたのだとほっとしているのだろう。

「そっよスバル君、テストが悪くてもへこんでいちゃ駄目だわ。しやきつとしなさいしやきつと」

「……隣に座っているカイ君は思いつきり寝ているよ?」

スバルの隣に座っているのは少しだけ長身の銀色の少年だ。名前をカイという。彼の机の中からは膨大な量の髪束が見て取れ、その中の一枚をちらりと見ると「6月1日提出」と書かれた白紙の紙がある。いろいろ担任は可哀想である。

この少年に関してはスバルはいろいろな憶測を跳ばしているが真

実はかすかではない。その憶測の一つとして、彼がああシルバー・ウィンドなのではないかというのがある。

シルバー・ウィンド、それは今年の5月から6月にかけて起こった重要人物の一人でもあった。最初はスバルの敵として現われ、けれど実際は仲間（？）ということが判明してなし崩し的に共闘もした電波体だ。

圧倒的強さ、周波数が無いという電波体でも異端な存在。サテラポリスとWAXAが協力しても見つけることが出来なかったもの。それが彼なのではないかとスバルは以前から思っていた。

けれどアリバイもあるがためにそれはルナやキザマロからも否定されている。よってシルバー・ウィンドではないのだが、どうしても彼なのではないかと疑ってしまう。

「カイはいいのよ。彼はテストで落ち込んでいるわけじゃなく、ただ眠たいだけでしょ？」

見れば気持ちよさそうにカイは目を瞑っていた。幸せそうである。きっと人生で幸せな瞬間は？ と訊かれたら「寝ているとき！」と答えることだろう。

「……僕も眠たい」

『おいおいだらしねえ奴だな。女にいわれてもへなへなしているのか？』

そんな挑発的な声はスバルのハンターから聞こえてきた。

「……ウォーロックか」

『おいおい、何だその言いようは？ まるでうざい奴みたいじゃないか俺が』

「……はあ」

スバルとウォーロックは1年前からの付き合いだ。最初はただスバルの父の話の聞くだけの存在だったのにも関わらず今では大切な相棒となっていた。地球の危機を4度も救い、キズナの輪を宇宙にも過去にも広げてきた。

だがそんな相棒2人だがいつもにこにこ接しているわけではない。こうしてウォーロックが冷やかすことも度々ある。

「いいじゃん、僕だつてへこむことだつてあるんだよ」

『おまえは地球を4度も救った男だぞ？ テスト如きでへこむんじやねえよ』

こんなことを教室でいってしまうウォーロックだが、もう周知の事実なのでスバルがロックマンだということは隠していない。面倒だから隠さねえ、というか自慢してやる！ とウォーロックは思っている。

「……だからロックマンだつていわないですよ。恥ずかしいじゃん」

『大丈夫だ。いつも廊下で叫んでいるから』

「何しているんだよ!!!」

へこんでいたスバルだがすぐに机から跳ね起きる。目が完全に焦燥の色を浮かべている。

『嘘に決まっているだろ？ 引つかかるなつて』

「今のは俺でも分かったぜスバル」

「僕もです」

「私も」

四人の言葉がスバルを打ちのめしていく。またスバルは机に突っ

伏してしまった。へこむ具合がさつきよりも上がっている気がする。

「……みんな僕に冷たい」

「今のあなたがさめているのよ、夏なのに」

胸を張りながらいうルナ、堂々と振舞えといたいのだろうか。それとも小さい胸を大きく見せたいのだろうか。作者には全く分からない。

「うるさい作者！」

ルナは若干赤面しながら叫ぶ。その声になんだなんだ、何を言っているんだ？ と視線を向けるクラスメイト。それを会長であるルナが視線だけで殺す。200年前にいたキラーマンと呼ばれるネツトナビがいたがそのナビのデスビームに匹敵するかもしれない威力だ。白金ルナ、恐ろしい少女だ。

「それで、夏休み一週間前なんだから夏休みどこか旅行に行く話をしましょうよ。ツカサ君とジャックが今委員会の仕事でいないのが残念だけど、きっと大丈夫なはずだし」

そのルナの言葉に再度スバルはため息をついた。おまえはため息マシンか、と突っ込まれてしまいかねない勢いだ。

「……僕、夏休み一緒に旅行いけないかも」

スバルの言葉に一番最初に反応したのは提案したルナだった。目を見開いて口をぱくぱくさせている。

「な、なんでよ。去年は一緒にヤエバリゾートへ行けたじゃない！」

「そ、そうですねよスバル君！ 何で今年はいけないんですか？」
「食いすぎたのか？ 給食を食いすぎたのかスバル！？」

最後の言葉には反応せずスバルはうなだれながらも説明を開始した。

「一週間前に、母さんからいわれたんだ。今年はテストの点数が悪ければ旅行にはいかせないって……。スバルも小学六年生なんだから中学生になるための準備を始めなきゃともいってた」

『ああ、たしかにそう言われてたな……。』

今更ながらにウォーロックも思い出したらしい。

「珍しいわね、スバル君のお母様が勉強に口出しするなんて」

ルナはスバルの母、あかねがあまり成績にこだわらない人だと思っ
っていたらしい。

「うん、本当に珍しいんだ」

ルナの言葉をスバルは否定しなかった。

「でも、母さんも何か考えているらしいんだ。……中学受験とかかも、しれない」

「ちゅ、中学受験！？」

「な、なんだそりゃ。食い物か？」

キザマロとゴンタがそろって声をあげる。後者は驚いているとい
うよりはただ食べ物と連想させているだけだと思っるのはきつと作者
だけではないはずだ。

「……別にそんなに驚くこと？」

しかしルナはいたって平然としていた。

「私だって両親からは薦められているわ。いくつか目もつけている学校もあるし」

中学校受験、というのは一部の小学生以外ではそんなのがあ
る？ と思う人も多い。受験は高校受験からが普通というのが大きい
し、あまり多くの人が中学受験をしないのもある。

「スバル君のお母様はそれも一つのスバル君の道として考えている
のね？」

「……たぶん」

「それで成績が悪いのなら塾か何かで勉強、っていうことなの？」

「……もしかしたら」

そうか、と少し視線を向け呟くルナ。

「お母様の意図も分からないではないわ。……でもね、スバル君。
やっぱり小学生は夏休みは楽しむべきだと思うわ」

何か意を決した瞳でスバルに語りかけるルナ。

「そうですね委員長！ 夏休みだってたっぷりあるんですから一
週間くらいどうってことないですよ」

「勉強なんて夏休み中しなくていいしな！」

「それはしたほうがいいですよゴンタ君」

どうやらキザマロとゴンタも同意見らしい。やはりみんな楽しみたいのだ、一年の中で最高のビッグイベントを。

「さて、では放課後スバル君のお母様を説得しましょう？」
「……へ？」

いつの間にかこんな空気になっているとは露ほども知らなかったスバルは思わずずっと素っ頓狂な声を上げてしまふ。しかしもう三人の勢いはとめられない。

「キザマロ、一緒にいくわよ！」

「分かりました委員長！」

「俺もいくぜ！」

「あなたは再テストがあるでしょ！ 来るにしても終わってから来なさい」

「えっ、ちょっと待って。僕の家に来るの？」

慌てたスバルの問いに、3人は意外にも揃った口調で

「何か問題があるの？」

と訊いてきた。

「いや、いろいろ問題でしょ！ 説得だけなら僕だけでもやるし」「気の弱いスバル君ならきつと失敗するだろうし、ウォーロックなら話も聞いてもらえないわ」

『ちよつと待て！ それはどつという意味だ！？』

「そのまんまよ」

……なんか、このごろのルナは口調に磨きがかかった気がする。

主にスバルの隣の席で座っている人間のせいで。

「とにかく、今日私とキザマロはあなたの家に行ってお母様を説得させるわ」

強引過ぎる！ スバルは思わず叫びそうになるがもう決定事項だ。魔王様の決定に臣下が従うのは世の常だ。

「……おいおまえら、うるさい」

横から飛んでくる気だるそうな声、見ればカイがむくりと身体を起こしたときだった。

「なんだそのテンションの高さは？ 授業があるってだけでテンションが下がるってのに……」

「あなたが寝ているのが悪いのよ。それとも何？ あなたはもう老人になってしまったの？ それだから寝なきゃ駄目なの？」

このごろルナとカイの口論が激しいと周りの人間はつくづく感じていた。お互い気の強い人間ということもあるだろうが、どうやら馬が合わないらしい。

「あほか。がみがみうるさいババアが横にいるのが耐えられないだけだ」

「こっちは今にもぼっくりとおなくなりそうなおじい様が横にいるからいちいち気を遣わなきゃいけないくて大変よ」

「ババアって否定しないってことは認めたな？」

「あなたもおじい様と認めるわけね？」

「……………」

「……………」

けんかになってしまつのではないかという険悪なムードが展開する。一触即発とはまさにこのことだ。

だが意外にも今回はあっさりとその雰囲気は終わりを告げた。

「まあいいや」

そういうと、カイはまた机に突っ伏した。

(……カイ君、そういえばこのごろこんな感じだな)

いつからかカイは少しだけ元気のなくなったように思える。本当に些細な部分がかけてしまったような、微妙な感じ。

(そういえば、ゲイルは?)

彼の相棒の姿を、カイはこのごろ見ていない。

(ゲイルは、どこにいったんだろう……?)

・(X-3) 話 突撃！ スバル邸

「ごめんください」

太陽がオレンジ色に輝き始めた頃、スバルとルナとキザマロ3人、それと何故かカイがスバル宅まで来ていた。

何故カイが？ と思う人がいるかもしれない。最初ルナもカイを連れてくる気などミジンコ並みになかった。そしてカイも髪の毛一本ほどついてくる気が無かった。別にスバルが夏休みに遊べなくても彼には関係なかった。そもそもカイはルナ達とどこかへ行く予定など持っていない。

しかしルナが「お邪魔してよろしいですか？」そうあかねに電話したとき「カイ君も連れてきて」といわれたのだ。

あかねがカイを知っている？ そんな疑問がルナにも過ぎよったがいわれたことには従う。面倒くさがるカイは無理矢理連れてこられた。カイとしては不満らしく「なんで俺が……」とさつきからぼやいている。

《はい、どちらさまですか？》

数秒後インターホンからあかねの声が発せられる。

「白金ですが……」

《ああ、ルナちゃんね。じゃあちよつと待っててね。すぐに開けるから》

するとそのまた数秒後にかちりとドアが開いた。中からあかねの顔が見える。その顔は何故ルナ達がここに来るかという疑問を持つていないようだった。ルナはまだスバルのことについて訊くため

だ、とはいっていない。ただ遊びに来たと思っているのだろう。

「いらっしやい……あれ？ ゴンタ君は？」

「ゴンタは、お恥ずかしながら漢字の再テストです……」

ちゃんと勉強させればよかったと嘆くルナ。まるで自分の駄目な子供に幻滅する親のようだ。ハンカチで涙をぬぐう仕草をしたらきつと全員が信じてしまうかもしれない。

「まあいいじゃない。そんなときもあるわ」

「ゴンタ君はいつもですけどね……」

キザマロも溜め息を吐きながら呟く。キザマロも本気でゴンタには失望しているようだ。さすがゴンタ、みんなに呆れられる存在だ。

「とにかく入って。ここじゃ暑いでしょ？」

今はもう夏の始まり、夕方と言っても暑さはそれなりにある。だからだと汗を掻いていて、カイ以外は今にも家に入りたい雰囲気醸し出していた。

「はい、ではお邪魔させてもらいます」

なぜかこの家の子であるスバルはルナとキザマロよりも遅く家に入ることになった。そのことに若干首を傾げながらもスバルも家へと入っていく。その後ろで

「あなたがカイ君？」

「……はい、そうっすね」

あかねとカイのやり取りが聞こえた。そういえばカイとあかねは初対面なのかもしれない。普段休日をスバルたちとスバルたちと過ごさないカイのことをそういえば教えてなかったな、と思うスバル。

リビングではエアコンが効いていてひんやりと汗を冷やしていく。そのせいか少し肌寒く感じたが、それでもすぐに服は乾いてく。

遅れてきたあかねはソファへと座った。そのあとに「あなたたちも座って」と促す。ルナが代表でお礼を言うと、カイ以外の3人はあかねと対面する形で座った。カイはというとソファに座れないのであかねが1つ椅子を用意した。

「どうも」

そっけない礼を言うところりと座る。少し礼儀がなっていないように見えるのは気のせいではない。

「……それで、今日は何しに来てくれたの？」

どうやらあかねはルナ達が遊びに来たわけではないと分かったようだ。スバルもルナも知らせたわけではない。恐らくスバルが少し居心地の悪そうな顔をしているのをあかねが読みとったからだろう。

「もしかしてスバルが何かしたの？」

「ちっ、違うよ母さん。僕は何もしていないよ」

「スバル君は何もしていませんわ。ただ、なぜか夏休みは今回遊べないと……」

それを聞いてあかねはスバルをちらりと見る。

「……今回のテストが駄目だった、っていうわけね」

「あの、何故今年は駄目なんでしょうか？ 中学受験をする気です？」

その問いにあかねはすぐに答えなかった。変わりに長くなるだろうと思ったのか、冷蔵庫から麦茶と少しの茶菓子を持ってくる。「好きにどうぞ」といわれるが誰も手をつける気配を見せなかった。それを見てカイが茶菓子を1つ貰っていく。腹が減っているのだろうか。ばりばりと茶菓子を食べる。実に意地汚い。

「……中学受験、っていうか、そうね。……スバル、まだ話していないの？」

あかねからの問いに、スバルは首を横に振るう。

「スバル君……何かあったの？」

「それが関係しているんですか？」

ルナとキザマロが立て続けに質問する。それに対しスバルはゆっくりと口を開いた。

「……僕が、将来宇宙飛行士になりたいっていうのは2人は知っているよね？」

「ええ、それは」

「たしか、お父さんを探しにいって」

だがキザマロははっとする。そう、もうスバルの父、星河大吾はもう帰ってきたのだ。この地球で、また幸せな家庭を取り戻したのだ。

「だけど、もう父さんは見つかった。……それで宇宙飛行士を目指

したくなくなつた、ってわけじゃないんだ。でも、僕はもう1つ目指してみようかなってというのがあるんだ」

「……それは？」

「科学者」

簡潔に、スバルはそう答えた。

「……エグゼの一件で分かつたんだ。熱斗君　200年前にいた光熱斗博士は僕達のためにがんばってくれた。だから、僕も世界のために新しい技術を造り上げたいと思つたんだ」

一ヶ月前に発覚したスバルとエグゼの、永遠のすれ違い。どちらも自分を犠牲にした。エグゼはシルバー・ウインドに恨まれ殺されることを選び、光熱斗はスバルがヘイトに勝たせるために『ガイア』を作った。

必要の無い犠牲などなかった。その一つ一つの技術が今でも賞賛されるものであり、それを犠牲にしてきた。ただ世界を救うというためだけに。自分は生きることが出来ない、だが技術は残ることが出来る。そんな当たり前の事実を知り、熱斗は技術を残したのだ。

「それは知って僕は思つたんだ。今まで世界を救うということは、敵を倒すだけだと思つていた。悪を消し去ることだと思つていただけで実際は違つたと気づいたんだ。いや気づかされた、っていうのかな。戦うこと以外でも、世界は救われるって」

あのタイムトラベルでスバルが何を経験したのかをルナ達は断片的にしか知らなかった。分かったことは、エグゼが未来を守るために犠牲になつたということ。それだけだった。

だから今更になつてルナとキザマロは思う。スバルは、自分達とは全く別の場所ステージにいるということ。

スバルが何を経験したのかを知っているカイは、しかし特に話に興味がないのか欠伸を掻いている。

「……僕は、それだから、科学者になりたい。宇宙にブラザーバンドを広げることも必要だと思うし、他の分野についても必要だと思う」

「だから勉強しなさいって、あかねさんは言いたいんですか……？」

ルナの質問に、あかねはかすかに頷いた。でもそれはスバルの決断だ、ともいった。

「スバルは、大吾さんの影響からか理科は出来るわ。でもスバルが行きたいっていう学校は理科だけが出来ればいいっていうんじゃないの」

「そ、そんなに難しい学校を受けるつもりなんですか……？」

ええ、あかねはキザマロにそう答える。

「なんならパンフレット見る？ ハンターに入っているから」「ぜ、ぜひ」

その返事を聞いてあかねは自分のハンター 名前と一緒に茜色だ を操作してキザマロとルナ、それからカイへと送信する。この時代近い場所にいればアドレスなど知らなくても送信あ可能だ。昔でいう赤外線通信を強化したような感じといえばイメージしやすいだろう。

「こ、これって……」

「す、スバル君、ここを受験しようとしているの！？」

キザマロとルナが思わず驚愕の声を上げる。カイもその銀色のハンターに映るデータを見て若干ながら声を漏らした。

「……うん」

スバルも少し自信なさ気に頷く。

その中学校、というよりそれは中学校も高校も大学も併設していた。その学校の名を、センジョー穿城大学附属。

この穿城というのはニホンで恐らく三本の指に入る学校だ。「中途半端な万能家シネラリストではなく究極の専門家エキスパートを」というキーワードをもとに授業を行っている。私立、と思う人が出てくるかもしれないが違う。あえて言うならば「世立よりつ」といったところか。世界中が建てた学校である。

もちろんニホンだけに世立があるわけではない。国際的友好を証拠とするため、ということでもニホンにも作ったということだ。アメリッパにも世立はある。先進国ならその規模に少しの差あれ、全部にあるのだ。

しかしもちろん入学条件は厳しい。地位や今までの功績などで判断することはないが、謳い文句とは違う全ての教科 国語、算数、理科、社会、英語など の問題がテストで出題される。テスト時間は12時間、解答用紙も20枚に及ぶとされ、ニホンで一番厳しい試験だろうと噂される。全100問出題される。一問一点だが、何点以上が合格なのかは公表もされていない。

「今からじゃ難しくないですか……？ たしか、小学校人生を全てこの学校の為にあてても不合格だった、っていう噂もあるんですけど……」

「まあ、並みの奴なら無理だろ」

ここで初めてカイが口を出した。

「このテストは別に勉強が出来るかどうかじゃねえんだ」

「……どういうこと？」

「出題される問題って100問、だけどこれって小学生で取れる問題じゃねえんだ」

「それならもつと小学生の問題よりも難易度が高いと？」

「当たり前だろ」

呆れながらもカイは続ける。

「いいか？ さつき小学生の六年間を無駄にした奴がいたっていったな。けどそれって、『学校に入る』ためだろ？」

「それはそうでしょ？ いい学校に入るために勉強するのは普通じゃない」

「でもそれだけで中学校、高校、大学を厳しい勉強に耐えられるか？ 好きでもないことを、将来の為にわかっていわれて出来るなら誰でも勉強できる」

「……………」

「それに全部の教科を試験するってことって、キャッチコピーと違うだろ？ 本当に専門家^{エキスパート}を求めているなら受験者が一番受けたい学科だけを受けさせればいい。けど穿城附属はそうしない。何故か、あくまであの学校が求めているのは「努力する才能ある人間」ではなく「努力する凡人」ではないんだ」

それはある意味では残酷なことだった。

「ああ、つっても才能って言葉は間違っていたな。実際は違うな。」

1つの物事をどれだけ好きかってのを試験するんだ」

「……………」もつと分かりやすく説明して」

「つまりだ、ただ学校に行きたいだけでは絶対にたどり着けないく

らしいの領域まで踏み込む問題を出すんだ。一般相対性理論を完璧にまさか分かる奴がそんなにいるか？ そいつはその道を本気で好きな奴だ」

「学校に受かりたいだけでは勉強しないところが、出るの？」

「何故全教科出るか、何故膨大な量の時間と問題を出すか。それは自分の一番得意な問題を見つけ、解かせるためなんだな。どの教科も取ろうとする奴は時間を取って点は取れない。逆にその道だけを取れる奴はその道の問題しか解かない。そいつは結構時間がちょうど良かったりする」

合格点なんてない、カイはいった。

「つまりスバルが夏休み全教科勉強しようとしているけど、それじや無理つてこと」

「え……？」

「自分の好きな教科だけを突き抜けて勉強しなきゃ駄目なんだ。全教科全てを大学以上出来る奴なんて、ほとんどいないんだから」

ま、それでも合格は厳しいけどな、とカイは追加する。

「全教科出るつてのはある意味フェイク。全てはキャッチコピーが語っているだろ？ 中途半端な万能家はいらジェネラリストないつて」

「……それでも僕には厳しい」

「そう、今まで積み上げたものがまだ少ないからな。……でも、本当に好きなら夏休みから頑張ればいけるんじゃないのか？ 穿城が求めているのはまさにそれ。好きなものを、本気で追求する探究心だよ」

好きで居続けるにも才能だ、カイはいった。まるで自分に言い聞かせるように。

「試験だから全てをテストするのもかもしれない、って思う奴がほとんどだ。でもそれって、そいつにとって無駄なことだろ？ つまり穿城は「自分にとってどれが必要か」っていう意味も込めてテストしているんだ。」

ま、これは友達からの受け売りだけだと付け足すカイ。あとは勝手に考えてくれと言ってそれからそっぽを向く。

「 穿城附属に行こうとするなら、仕方がないかもね」

ルナはさっきからのカイの説明のあと、ぼつりともらした。

「たしかに今から行くっていうなら、夏休みは全てつぶしても仕方がない……今年旅行は、やめましょう」

「……ごめん」

「いいのよ。というか、ブラザーならあなたを応援しなきゃいけない。謝るなんて、おかしいわ」

ふっつと笑みをこぼしながらルナはいう。

「じゃあ、今年はみんなで夏祭りに行きましょう！」

「……へっ？」

思わずキザマロとスバルは目を丸くする。

「いいじゃない、夏祭りなら一日時間を使わないわ。それに、いい気分転換にもなるでしょ？」

ルナはもうこれで決まりだ！ と思っっているらしく目をぎらぎら

とさせている。

「もちろんカイもいくわよね？」

「行くわけねえだろ？ おまえのいう夏祭りって天涯祭りのことだろ？ その日は俺用事がある」

天涯祭りというのはTKシティで行われる大規模な夏祭りのことだ。花火を約1000発、屋台の数は500を超えるもので、祭りに来るものは10万人はくだらないといわれている。

「8月3日だっけ？ 今年は。俺はその日外せない用事があるんだよ」

「何？ 彼女と一緒にデート？」

「あほか。そんな奴に見えるのか？」

360度から見てもそんなことはありません、とルナは答える。

「スバル君とキザマロもそれでいいわね？」

「僕はOKです」

キザマロもルナと同じように夏休みをただぼーっと生活したくないのだろう。それに小学校最後の夏休みである。何か思い出が欲しいと思うのは当然だ。

しかしスバルはすぐに答えなかった。迷っているのだろうか。これから彼は本気で勉強しなければいけない。1日も惜しいはずだが

「分かったよ、委員長。僕も行くよ」

諦め半分、そしてもう半分はみんなと一緒に思い出を作ろうと思

う気持ちだろう。数時間前まで夏休みを遊べないと嘆いていたのだ。

「……それでこそスバル君」

とびきりの笑顔を作って、ルナは頷く。誰もがきつと、この夏休みを無駄にしたくないのか。

「分かったわね？ カイも行くのよ」

「……………」

まだ不満顔な銀髪の少年、ルナの強引さに呆れているというかうざがっているように見える。本当に外せない用事があるようだ。

「……スバル、こんなブラザーに囲まれているんだから、ちゃんと勉強がんばりなさいよ。私はどこの学校行ってもいいから」

そういうあかねの顔は、夕陽によって染まっていた。

けれどこのときの決断をルナは後悔することになる。このときの決断のせいで、世界は大きく揺れるのだから。そして、大事なブラザーを一人、失ってしまうのだから。

「……で、何でまだカイ君はここにいるのさ」

「知らない。とにかくおまえの母親がまだここにいろだってさ」

もうルナとキザマロは用が済んだので帰ってしまった。だがカイ

はまだ帰っていなかった。そういえば、カイはあかねに呼ばれてこの家に来たのだ。けれどあかねがカイに何か用がある素振りそぶりを見せない。

「……母さんが？」

「俺もあの人が俺に用があるとは思っていないんだが……」

そういつてカイは早く帰りたいなとぼやいていると

「ただいま」

大吾が帰宅してきた。時刻は6時半ごろ、普通の帰宅時間といえはそうだろうか。

彼は今WAXAで働いており、行方不明になるまえの仕事の延長上にあるものを今こなしていた。それと同時にヘイトの一件でのこと「おまけ」も調べているのが現状だ。

「あ、お父さん」

スバルが帰ってきた大吾へと声をかける。だが大吾はスバルを見ることはなく、その隣にいる少年に、視線を注ぐ。

注がれているカイも睨み返す。今日あつたばかりの2人なのに、やけに緊張感を出しているようにスバルには映った。積年の恨みを持つている敵を見るみたいで、一瞬スバルはたじろいでしまう。

「……スバル」

大吾はキッチンにいるあかねを見て

「母さんと一緒に買い物をしてきなさい」

「……どうしたの急に」

「父さんは、カイ君と話すことがあるんだ……。カイ君のお父さんは、WAXAで働いていてね」

えっ、声を上げながらスバルはカイを見る。そんなことは初めて聞いた。

「そのことで少しお話したいんだ」

「WAXAのことを？ だったら僕も」

「いや、WAXAのこととは少しかけ離れているんだ。結構プライベートな話になる」

その言葉にカイを呼んだのが大吾だとスバルは悟った。そして大吾の顔が、いつもより真剣みを帯びていること、これは自分が聞いてはいけないということ。

「……分かった。行ってくるよおとうさん」

「夕飯は、おいしいもので頼むよ」

微笑みながら大吾は妻と息子を送った。どこからどう見ても、その姿は優しい父親だった。

「さて」

だが、カイを見つめる視線は慈悲にあふれているものではなかった。冷酷、冷徹、そんなものが適しているかもしれない。普段の彼では考えられないものだった。

「では、そのソファに座ってくれないか」

カイはそんな大吾を一瞥してから、言うとおりにソファに座った。表情は硬いわけではない。だけど緩んでいない。凜と引き締まっている、という表現があっているだろうか。こちらもまたいつもの彼ならあり得ない表情だ。

大吾はカイ対面する形で座る。

「何故ここに呼んだか、君は分かるかな？」

「俺の父親はたしかにあんたの先輩だが、特に何かを言われる筋合いはないな。星河大吾」

カイは、大吾に対し敬語を使わなかった。瞳が獲物を見る見たいに獐猛で、強暴だ。

「言葉が少し荒れているな」

「話を反らして馬鹿を踏むとでも？ その考えは捨てる」

今ここに木刀があれば、殴ってしまいかねない勢いでカイは言い放った。

「……君のウィザードはどうしている？」

カイの言葉に素直に従いながら、大吾は質問する。元々彼もカイが揺さぶれるとは思っていない。

「旅に出た、っていったほうが分かりやすいか？」

「旅？」

「もともとあいつは、はぐれ電波体だった。ひょんなことからただ一緒になったんだよ。だから別れも唐突」

「ヘイトの事件が終わってすぐに、か」

だがその言葉にカイは眉一つ動かさない。

「そうだな、時期的に。世界がいつ滅ぶか分からないから、今のうちに世界を回りたいと思ったのかもしれない」

「なんて気ままな奴なんだな」

「ゲイルっていうんだが、俺並に気分屋だよ。まさに風の向くまま気の向くまま、って感じだな」

特に表情を変えずに2人は会話する。それはコミュニケーションというよりは情報交換といったほうが正しい。ただ2人は『会話』ということがもつとも楽であったためにそれを実行しただけに過ぎない。他に楽で情報が手に入るなら、それを行うだろう。

「君は、ヘイトとスバルが戦っていたとき、WAXAにいたようだね」

「そうですね、戦いを見ていたよ」

「そのときゲイルは？」

「いましたよ、そりゃ。さすがにそのときどこに行くわけないじゃないだろ」

「正直な話をする、我々WAXAとサテラポリスはゲイルこそがシルバー・ウィンドだと思っている」

その言葉に、カイは驚かない。

「前もそういつて一度確かめたけど？　なんか大それた装置にいられてたけど」

「シルバー・ウィンドってのは貴重な金属を持っている、知っているか？」

唐突な問いにカイは片眉を動かした。

「金属……?」

「そうだ。ムーメタルと呼ばれるものだ」

「ムーっていうと、あの?」

「そうだ、私はそのときいかなかったが、去年の今頃オリヒメという科学者がそれを操って地球を征服しようとしたね」

そんなことはカイだって知っている。

「で、その金属をシルバー・ウィンドが持っている?」

「知らないのかい?」

「知らない、そりゃあ」

退屈そうに答えるカイに、大吾はさらに質問をする。

「たとえば、だ。シルバー・ウィンドというのは電波人間だと推測される」

「ウィザードではないのか。たしかWAXAの公表によるとウィザードと人間が融合したのが電波人間だったんだろ?」

「そのウィザードと電波変換するのは、必ずしもそのウィザードのオペレーターではない可能性もあるわけだ」

「……つまり、ゲイルは俺とは違う人間と電波変換してシルバー・ウィンドとなっている?」

「私達の予想ではそうなっている。しかし、それを君が知らないとは、私達は思っていないんだよ」

- (X-3) 話 突撃！ スバル邸（後書き）

感想待ってます！

・(X・4)話 平穩はぶった斬られる

『なあ……俺達はいつから表に出れるんだ？』

どこか、遠い場所で、待ちくたびれて今にも暴れだしてしまいそうな欲求を孕んだその声は虚空へと響く。

『もうすぐだ』

聞くものを畏怖させる声で誰かが答える。

『ああ、そのとおりだ』

凜とした声で他の誰かが答える。

『ようやく準備は整ったのですから、大丈夫でしょう』

どこか愛おしさのある声で他の誰かが答える。

『計画は順調だ……あいつが死に、ようやく邪魔者がいなくなったのだから』

どこか苦しさをにじませる声で、声で他の誰かが答える。

『ヘイトはただの捨て駒……いくなれば腕試し。私達からが本番です』

どこか悲しさを含んだ声で、誰かが答える。

『始まるぞ、これから』

絶望のふちに追いやる声で、誰かが答える。

『世界を、人類を、破滅に追い込む計画が』

希望に道か声で、誰かが答える。

『……長すぎだろ、これまで』

一番最初に質問したものが、怒りのままに言う。

『そうですか？ 私達にとっては1カ月しか経っていませんが』

『当たり前だろ？ 俺は殺したくて殺したくてうずうずしているんだ』

『だからといって、その前に主役の3名を、一年前に襲撃したのは誰ですか？』

『そのためだけに俺は生きてきた』

嗤いながら、けれど怒りも携えながら、そのものは言う。

『ああ、さっさと殺してえな』

午後9時、ルナ達の電撃訪問とカイへの質問が終わったスバル宅には平穏が流れていた。もともとこの時間は自由時間だ。テレビを見るもよし、風呂に入るもよし。そしてその時間、スバルは自室で

宿題をしていた。

「多いよな算数……」

彼はいま夏休みの宿題をやっていた。けれどまだ夏休みには突入していない。しかし、だ。夏休みの宿題とは意外に早く配られたりすることもある。今回のスバルはまさにそれだった。早めに終わらせてくれるように先生が配慮してくれた結果、こうして早めに夏休みの宿題をやることが出来る。

「結構難しいし、夏休み前に終わるのかな？ ……終わらせなきゃいけないんだけど」

彼は夏休みに中学受験の為に勉強をしなければいけない。カイからの話によりいろいろと予定変更もあったものの、夏休み前に宿題を終わらせなければいけないことには変わらない。

『おい、そんなつまらねえことするなって。俺が暇だろ？』

「ウオーロックはいつも暇でしょ？」

『おまえのやっていることがいつも以上につまらねえってことだよ』

けれどハンターの中の相棒には宿題などあるわけがない。その間彼は暇だ。平和な世界になってしまえば、彼のような生き物は生きていけないのかもしれない。

『なんか、平和な世界になってもつまらねえよな。何で俺は世界なんて救ったのか、なんて思っちゃまうぜ』

「……それは僕達のやってきたことを否定するつもり？」

『そうじゃなくてさ、いい奴で強い奴がいなかった話だよ』

「アシッドがいるじゃないか」

『あいつはいい奴じゃねえ』

犬猿の仲であるならそういうのも仕方ないが、実際アシッドはウオーロックと同等の力量を持っている。喧嘩をしてこいとは思わないが、正々堂々のバトルならいいとは思はスバルは思っている。実際ウイザード・バトルというのが現実にあるのだから。

「いつつも喧嘩しているけど、もしかして仲がいいとかそんなものじゃないの？」

『あほか、俺はあいつとあ相容れねえ。たとえ共通の敵がいてもだ』『ふ〜ん……』

かりかりとペンを進めながらスバルは、ウオーロックが求めている人材を探してみる。だがオックスやコーヴァスやヴァルゴ、ジエミニなどのウイザードしか思い浮かばない。

『敵が現れてくれればなあ……』

「物騒なこといわないでよ。そのせいで多くの人が悲しむんだよ？」

『それで俺が楽しければそれでいいじゃねえか』

「……平和だからそんなことをいえるんだよ」

平和な世の中、それはある意味で刺激が足りない世界ともいえる。ただ同じ毎日を過ごし、その中で小さな喜びや悲しみを搾取する。それがこの世の中の生き方だ。けれど刺激的な世界は搾取しなくても勝手に受け取ってしまう。喜びや悲しみを、そのままの形で。

「そんなウオーロックに僕がいいことを教えてあげるよ」

『ああ？ 暇じゃなくなる方法か？』

「そうじゃなくて、ある小説の、ある1人の登場人物がいうセリフだよ」

『小説……？ そんなことで俺が満足すると思っっているのか？』
「まあ聞いてよ。……』簡単にいうとね、非日常になると、最初だけは刺激的な日々を送れる。だけど時間が経てばまたそれが「日常」になってしまう。また非日常にすると、最初だけは刺激的な毎日を送れる。でも非日常に「慣れ」てしまうと日常になってしまっ『んだ』
『……つまり新しい敵を求め続けると？』
「まだ続きがあるよ。』そうして非日常から日常になることを繰り返すと、そのうち「慣れることに慣れてしまっ『んだ』って」

その言葉が瞬時に理解できないのか、ウォーロックは数秒声を出すことが出来なかった。

『……つまり、いつかは新しい敵が見つかってても楽しくなくなるってわけか？』

「そういうことだと思っよ？」

『……だけど小説の中の話だろ？』

「僕は結構的を射ていると思っよ？」

適応能力の強化、といったらいいのだろうか。何でもすぐに適応してしまうようになってしまっ。そのせいで面白く感じられなくなる。

『ああっ！ それじゃあ面白いことなんて無くなっちまっじゃねえかよー！』

「そうかもしれない……ううん、きつとそう。だからさ、僕は今ある日常を大切にすべきだと思っんだ」

『……おまえはこの日常に慣れても、楽しいのか？』
「楽しいよ」

何の淀みもなくスバルは答える。

「すごく楽しい、みんなといれて。それに不満はないよ」

『……おまえはそれでいいけどさあ』

「だったら、ウォーロックも慣れればいいじゃん。小さな幸せを掴むことを」

そうすれば楽しく感じるよ、スバルはそうも言った。もう自分は慣れたといっているかのように聞こえる。

『……1年前までは引きこもりだったとは思えねえ発言だな』

「そ、それは言わないでよっ」

顔を引き攣らせるスバルに対し、ウォーロックもしてやったりと笑っていた。そんな光景を端から見れば、きつと人生を楽しく過ごしているのだろうと思われるかもしれない。

「とにかく、僕は楽しいから君も精一杯楽しもう。危なっかしいことばかりが、楽しいことじゃないよ」

『努力はしてみるぜ、一応な』

きつと、1年まえのウォーロックならこんなことをいわなかったかもしれない。それだけ彼にも余裕が出来たからなのか、それとも人間という種族をより深く理解してきたからか。

「……とにかく僕は算数を終わらせないと、勉強できないし……っ
と？」

そこでスバルがハンターを見てみると、ちょうど今メールが届いた。だけど知らないメールアドレスで、スバルは思わず首を捻る。

「誰からのかな？」

『イタズラメールじゃねえのか？』

「違うと思うよ、一応はクラスのアドレスは持っているし」

『……おまえ、一応友達はいたんだな』

失礼だな、と内心で思いながらメールを開く。

「……………10時に穿城大学で待つ？」

『おつ、誰かから告白か？』

「そんなわけないじゃん……でも、誰だろう？」

誰からか分からないメール、思わず胸の鼓動が早まるのをスバルは感じた。彼は第六感的直感で感じ取ってしまったのだ。これが、何かの始まりだと。

「……………行ってみよう」

『は？ どうしたんだスバル。……こんなメールなんて無視すればいいじゃねえか。間違いメールかもしれないだろ？』

「そんな可能性ほばないよ……それに、きっとこのメールは」

また戦いの始まりを告げるものだ、反射的にそう答えそうになっ
ていて思わずスバルは口を塞ぐ。それではまるで、自分が平和な時
間を求めているように感じられたからだ。

「……………とにかく行こう、ウォーロック」

『ああ、おまえがそういうなら……』

「じゃあ行くよ。トランスコード シューティングスターロックマ
ン」

穿城大学、というのはいくつもの学校が内包されている。小等部、中等部、高等部、女子学院（小等部、中等部、高等部の女子専門）、大学の5つに分けられている。当然面積も馬鹿みたいに広く、TKシティを一番閉めているかもしれない。

そんな中で、メールの指示にあったのは小等部の屋上だった。ロツクマンとなったスバルはそこに時間より10分くらい前に到着し、その地面へ降り立った。

「うわっ……すごい」

オープンキャンパスに参加したことないスバルは、実際穿城大学にきたのは初めてだ。その広大な景色を月光が照らす様は圧巻の一言に尽きた。本当にここが世界を支配するくらいの実力を持った人間がいるのだと実感させられる。

『おいつ、そんなことしている場合じゃねえだろ？ おふくろにはそれらどうするんだ？』

もちろんこんな時間にあかねと大吾が外出を許すわけがない。こっさり抜け出してきてしまったのだ。

「そうだね……っていつても……」

小等部の棟は計6つ、そのうちどれがとも指定されていない。適当が一番近いところに下りたものの、メールの差出人がいるかもわからない。

『そもそも、そいつは来るのか？ イタズラメールかなんかだろ？ マスコミか何かかさ』

「それはサテラポリスがなんとかしてくれているから違つよ……。でも、ここに来るかは分からない」

万が一、間違いメールの可能性もありえる。そうだった場合はとんだ無駄骨だ。

「おまえにしては結構即決だったけどよ、何か心当たりがあるのか？」

「……ない」

「ないのかよっ！」

その声は天高く響いた。警備システムでも作動したらどうするんだ！と思わずスバルは内心で叫ぶ。

そこでふと思つた。世立ともあるところだが、屋上から進入してきた何者かを知らせるために何か用意しているのが普通ではないか？ なのに何故それがないのだろうか？ ないということは、誰かが切つたとしか考えられない。

そう思考を広げたとき、後ろから誰かが歩み寄ってくる音がスバルの耳に届く。

「ッ」

慌てて振り返つた。恐怖や不安からくるものかもしれない。スバルの眼は血走っていたのだから。

「おやおや、そんなに警戒しなくても」

聞こえたのは少年の声、この場には不釣合いな愉快そうな声だ。

月の光に照らされたのは黒に近い紫色、そして服の真ん中に描かれるどくろマーク、趣味の悪さは折り紙つきとも言える。ファッシ

ヨンセンスが壊滅的なのかもしれない。

「星河スバル……ここではシューティングスターロックマンといったほうがいいか」

歩み寄ってくる少年の足取りに何の乱れもない。それがスバルを強張らせる。何故こんなにも自分を見て平然としていられるのだと。少年は、スバルから五メートル程度の距離を開けて足を止めた。それからゆつくりと、満月とは違い三日月形に口を引き攣らせ、自己紹介をした。

「はがみくるかけ覇神黒影くろかげっていうんだ。よろしく」

こうして、スバル達の短くも平穏なときは、幕をぶつた斬られた。

・(X・4)話 平穩はぶった斬られる(後書き)

感想待ってます！

・・・なんか前作のお気に入り登録数が徐々に増えている！ こっちは増えていないのに！ なんか哀しいですが嬉しい、この微妙な感情の狭間。

とにかく、私みたいな作家の小説を読んでくださってありがとうございます！

・(X・5)話 別に恐くなんかないさ

「はがみ、くろかげ……？」

オウム返しのように繰り返すスバル。別に名前が聞き取りづらかったわけではない。その名字があまりにも有名すぎたからだ。

覇神というのはニホン最大の会社でもある。その分野は多岐に渡り、覇神コーポレーションが無ければニホンは壊滅するといわれるくらいだ。

また、前社長が謎の事件によって命を落としたことはマスコミを通じて大々的に発表される予定であり、その次期にFM星人の襲撃があった為に、あとからその報せを聞いたというものも少なくない。そのために株価が以上に上下して一時期世界経済が破綻しそうにもなったくらいだ。

そのあとを継いだのが当時11歳ばかりの少年だとはスバルも知っている。つまり1年が経過した今、その社長は12歳ということになる。ちょうど今の目前にいる少年くらいに。

「そうそう、覇神黒影。よろしく」

笑顔でそういう覇神だが、スバルのほうへと歩み寄ってくる気配はない。5メートルという距離をあけたまま悠然と構える。

(この距離……)

相手の攻撃も自分の攻撃も当たらない距離、相手が詰めに来てもすぐに対応できる距離だ。それを覇神はびたりと計っている。上申では有り得ない。そもそも、ここに居ることがまず異常なのだが。

「それで、僕に何か用があるのかな？」

ここではまず相手の情報を手に入れることが大事だと反射的にスバルは理解する。あまりに情報が乏しすぎてここからどう行動すればいいのか彼にはわからなかった。今すぐ背を向けて家へと帰りたかった。だがそれが出来ない。背を向けたら最後、後ろから刃を突きつけられてしまう予感がしてしまい、そんなことをしてはいけないと脳が喚いている。

「おお、さすがこんなわけ分からない展開でも冷静さを保つとは、『英雄』様だけある。口笛と拍手で誉めてあげたいくらいだよ」

満月に照らされる笑みは獯猛で、その腕に武器が無いのか不思議になるくらいだ。きっと覇神が宣戦布告をしてもスバルは驚きもしないだろう。こんな人間が、こんな会話をしていることにスバルは驚いている。

「……質問に答えてくれないかな？ 僕もお母さんが家で待っているんだ」

「そうかそうか、世界を何度救おうが君は小学生か。その裏でアポロンを倒そうが宇宙の果てでシリウスをデリートしようが、ただの小学生か」

何気なくスバルに対しての侮蔑を混ぜながら覇神だが、その何気ない言葉にスバルは思わず反応した。

「なんで、君はそれを知っているの……？ アポロン・フレイムはパラレルワールドの存在でこの世界にはいないし、シリウスはFM星人と三賢者しか知らないはずだよ………？」

あのとときスバルは仲間を誰一人連れて行かずに1人で突っ込んでいった。今から考えれば驚くほど愚行だが、逆にアポロンとシリウスに関しては内密に倒すことが出来た。つまり地球に住んでいるもので知っているのはスバルだけなのだ。

「君はどこで知ったんだ？　なんで、なんで……」

「それは君の勘違いだよ。君が知っていることを、僕が知っていて何がおかしい？　たとえパラレルワールドだろうと、宇宙の果てだろうと、僕は知っているよ」

「じゃあ、君は僕を尾行してきたっていうのかい？」

「そうじゃない、僕は君がヘイトを倒すまですっと待っていた。それこそ気が狂うくらいに」

ヘイト、またスバルの敵だった名前が現れた。最初のFM星人の襲撃から、ヘイトのことさえも覇神が裏で暗躍してしまっているのではないかと錯覚してしまい、思わず後ずさる。しかしその距離を覇神は丁度詰めてくる。

「話は全部僕の知り合いから聞いているんだよ。ま、そいつも君を尾行していたわけじゃないけどさ」

「……尚更どうして知ったの？」

どう頑張っても裏世界とブラックホールのことは分からないはずだ。絶対に、絶対にそうに違いないんだ。

「パラレルワールドって知っている？」

先ほど覇神の口から漏れた単語がスバルの脳を駆け巡る。

「パラレルワールド、漢字では平行世界といったらいいかもしれない。僕達の世界とは違う世界のことだよ」

淡々と語るその口調からは、スバルに教えるという気は皆無に見えた。ただ義務だから、仕方無しに語っているかのように言葉を吐き出す。

「当然僕達とは違う世界だけど、何も全て違うわけではない。所々違うっただけなんだ。……たとえば200年前にロックマンエグゼは負けて世界は滅びた、とか。アイスが無い世界とか。僕が産まれなかった世界とか。似ているけどちょっと違うっという世界がこの世界にはたくさんある。」

もちろん平行世界というくらいだから僕達は普通その世界へは行けないんだ。通常、人は一生一つの世界で生まれて死ぬ。……でもね、君は僕の知り合いと同じようにパラレルワールドを渡ったように、『ラ・ムー』によって滅びた世界』を見たはずだ。そうだろう？ ……察しがついたようだね、そうさ。僕の知り合いはそのいろんな可能性の世界を渡り歩いたんだよ。それが何回、何十回、何百回かは分からない。でもとにかく情報を得るだけの世界は旅したんだよ。その中には、たとえば君がアンドロメダに敗北する世界もあったかもしれない。だけど情報は得ることができるんだよ。その何回という旅によって、僕の知り合いは世界のほとんどを知り尽くしたっつてわけさ。……お分かりかい？」

そんなことをいわれてもスバルにすぐ理解しろと言うのは無理な話だ。あまりにもスケールが大きすぎる。世界を渡り歩いた、自分が敗北した世界、そこで情報を得る、何もかもがスバルには到底処理できるものではない。

「それで僕達は、アポロンやシリウスなんかの話も知ることが出来

た。……もつとも、あんまり知り合いは情報は持つてこなかったけどね。残念な話さ」

「……なんでそんなことをしたの？」

「知らない、僕はあくまで聞いたただけだから。ムーメタル持つてないし」

何気ない言葉、なのにまたスバルは眉をひそめる。注意していなければきつと聞き逃してしまっていただろう。それとも、覇神がわざと気づかせるように言っているのか。

「その知り合いって、まさか……」

ムーメタル、それはスバルにとって聞き覚えのないものではない。以前まで彼の身体の中に内包されていたものだった。そのためにソロというムーの子孫とも戦った。そして、それをシルバー・ウィンドに奪われた！

「そういうことだよ。僕はシルバー・ウィンドと繋がっているんだ。あいつと出会ってからずっと、ね」

シルバー・ウィンド、それとニホン最大企業の社長が繋がっている。聞いてみればたしかにありそうかも、と思うかもしれない。だが実際それを目の当たりにして、驚かないという話が無理なのだ。

「じゃあ、君も……」

「僕のウィザードもネットナビだよ。もつとも、ウィンドと比べたらこっちのほうが優秀だけどね」

覇神の言葉が真実であるならば、あの銀色の剣士よりも強いという意味だ。そんな敵がメートル先にいるということはスバルにと

つて重圧となつて押しかかる。逃げたい、でも逃げられない。

『……さつきから黙つて聞いて好きかつて喋りやがって。用件はなんなんだ？』

ウォーロックも覇神がどれくらいの敵なのかも分かつているはずだ。なのにこのウィザードは怖じることなく喋りかける。

『てめえがここに呼び出したのは何か俺達に用があるからだろ？ わざわざ正体を明かしてくれるのは構わねえが、俺達はシルバー・ウィンドがどんな奴なのかもつかめていねえ。だからおまえが何をしに来たのかも俺達には予想もつかねえ』

いつものウォーロックと比べれば驚くほど冷静な声だ。だがこゝろどころで震えるのがスバルには分かる。まるで何かを抑えつけているようだ。

「話が早いね、喧嘩っ早いと思つていたけど実際はマシなほうだったらしいね。用件用件……簡単にいえばさ」

君たちを潰しに来た」

その瞬間ハンターの中にいたウォーロックが出たかと思うと、一瞬で覇神のほうへと突っ込んでいく。紅い眼はきつちりとその小さな身体を捉え、光り輝く爪はその身体を引き裂こうと。

『テメエがシルバー・ウィンドとどう繋がっているか知らねえが、

あいつには借りがあるんだよつ。いい加減それを返したいからな、
テムエにはあいつの居場所を吐いてもらうぜ！」
「ちよつ、ウォーロックっ」

生身の人間相手にウィザードが本気で力を振るえばどうなるか、
そんなこと論じなくても分かることだ。それもウォーロックが振る
えば、よくて重体といったところだ。それをウォーロックは知って
いるはずなのに、生身の覇神相手に本気で力を振るおうとしている。

『ビーストスイング！』

もはやスバルが静止する暇さえない。勢いづいた銀色の鋭利な爪
は覇神に眼を瞑る暇さえ与えず振るわれる

『ドリームオーラ』

はずだった。

聞こえたのは肉が避ける音ではなく何か硬いもの、それも爪を弾
くほどに強固なものがぶつかる音だ。衝撃で火花が散り反動でウオ
ーロックが大きく後ずさる。

覇神を守ったのは虹色のオーラのようなものだった。禍々しく存
在するそれは何者も近づけがたい雰囲気醸し出している。

「いきなり襲ってくるなんて、どんな駄犬だよ」

覇神はオーラに守られながら余裕の表情でそこで佇んでいた。姿
かたちも変わっていないところを見ると、どうやらただ彼のウィザ
ードがオーラを展開しただけのようだ。

ウォーロックはこれを知っていたのだとスバルは遅まきながらも
理解する。こうなることを予想して突っ込んで、あわよくば倒して

しまおうとしたのだ。確立が低いことを知りながら。失敗することを前提にして。

『ちっ……かてえな』

「君ごときの爪じゃ無理さ」

覇神のハンターにはウィザードがいる、つまり電波変換はいつでもすることが可能ということだ。なのにそれをしない、何か策を打ってくるつもりなのか。

「君たちを潰すといつてもね、僕が直接手を下すわけじゃないんだ。そんなことをするのはとても好きじゃない」

そういつて彼は言葉を紡ぐ。200年というときを超えた、その一言を。

「サモンビースト グレイガ ファルザー」

たったそれだけの一言で、空気が震えた。周りの周波数が激変した。ついで地面が揺れる錯覚と真夜中に聞こえる狼の遠吠えにもにが咆哮と甲高い鳥の鳴き声。ふとスバルは自分達が影に覆われていることを知る。さっきまで快晴だったのだ、雲で月が隠れたわけではない。

天を仰いだ、敵が目の前にいるのにあり得ない行為だと思つかもしれない。ただと違う、上には強大な周波数を持つ何かがいることを、スバルは気づいたのだ。

視界に移ったのは紅い羽、黄色い嘴、なにより眼を見張るのはその巨大な体躯だろう。全長30メートルは下らないのではないかというくらいに巨大な怪鳥が、スバルの頭上に出現したのだ。

だが出てきたのはそれだけではない。ぎゃりっという音に視界を

移すと、そこにも『客』がいた。深緑色のフォルムにとげとげしいたてがみ、岩盤をも砕きそうな爪と牙、そこには巨大なライオンを模した電波体があった。

「そいつらは200年前、僕のネットナビが手に入れた『電脳獣』と呼ばれるものだ。ロックマンエグゼとアイリス、カーネルといったネットナビが封印もしたらしい。……こいつらのせいでインターネットはめちゃくちゃになっただけだよ」

地上にはライオンが、天空には怪鳥が、それぞれスバルへと目標とさだめいつでも攻撃可能な状態に入っていた。せまい屋上でこの2体に攻撃されれば、スバルとて無事ですむわけがない。

「……スバル」

「どうしたのウォーロック」

「……俺達に日常はないらしいな」

「……そうみたいだね」

思わずふつと笑みを零すスバル。彼の瞳にはさつきまでの恐れなどなかった。スバルが怖かったのは圧倒的強さを持つ覇神がこちらに攻撃してこなかった『異常さ』であり、攻撃してくるなら恐怖などない。彼が今まで、どれくらの死線を乗り越えてきたのか。

ウォーロックが何もアクションを起こさなかったらスバルは覇神から攻撃を受け恐怖から脱することもなくやられていたかもしれない。そのことに心のうちで礼を言って、スバルは2体の電脳獣を見る。

「……また戦ってくれるよね？」

『当たり前だろうが、あいつには聞きたいことがあるんだ。あの忌々しいシルバー・ウィンドに辿りつけないからな』

「それは僕も気になるけど、別に彼と戦いたいわけじゃないな」
『なんだとおっ!?!』

「……でも、ここで時間も空費できないしね。ママに怒られちゃう」

ハンターを操りスバルはバトルカードを転送する。ブレイクサーベル、特異な形をした直剣を右手に構えスバルは宣言する。

「だから、さっさと倒しちゃおう」

『……ああ、そうだな。まずはそれが優先だ』

その言葉に敵である覇神はこれ以上ないくらいに笑った。何がおかしいのか、楽しいのか、それは彼のうちだけにだけある答えだ。

「さあ、『俺』を楽しませてくれよ。……行け、電腦獣！」

主君の号令により2体の獣は一気にスバルへと突っ込んでいく。轟、とうなる風、それを肌に感じながらスバルは天高く声を張り上げる。

「ウェーブバトル ライド オン!！」

・(X・5)話 別に恐くなんかないさ(後書き)

電脳獣2体VSスバルと、結構ぶっ飛んだことを今回やってみました！ 初っ端からかますぜ的中！ そこにシビれる憧れるう！と
いってくれたら再考に嬉しいです！

では、感想待ってます！

・(X・6)話 運は何にでも勝つ(前書き)

今日気付いたのですが、なんと架け橋の感想がユーザのみから受付となっていました。これはいかん！ と思いついてすぐに制限無し、つまりユーザで無い方でもかけるようになりました。本当に申し訳ない！

・(X・6)話 運は何にでも勝つ

戦いが始まったから数分で戦場は大きく移り変わっていた。屋上と狭いフィールドでは、明らかにスバル達は戦いにくい。仕方なしに彼

らは地上へと下りて行った。だが

『くそっ……あいつら速過ぎる!』

電腦獣グレイガとファルザー、その2体の猛攻があまりにも激しすぎた。狭くその巨体では通れない道を、校舎を破壊しながら迫ってくる。

グレイガがその俊足でスバルの逃げている方向に先回りしたかと思うと、その巨大な口から火炎の吐息を吐き出した。左右に逃げ道は無い、放射状に広がる炎は大気を燃やしながらスバルに迫っていく。

「バトルカード ホーリーパネル オーラ!」

すぐさまその場でバトルカードを2枚使用。ダメージ半減と強固な防御力を持つオーラを展開させ、スバルはそれを迎え撃った。

スバルを避けるかのように炎は周りの建造物や地面を焼き払ってしまう。黒い煙 一酸化炭素と二酸化炭素が当たりに充満して視界

を悪くする。

「……ッ」

この2枚を使ってもオーラは引き剥がされてしまった。つまりそれだけあのプレスが強力であった証拠だ。ただ受けていたらどうな
って

いたかということを見ると、ぞっとしない話だった。

だがそれでも終わらない。敵は1体だけではないのだから。

『びいいいやあああああああああっ!!』

甲高い咆哮が聞こえたかと思うと、今度は上空にいるファルザーがスバルへと無数の何かを向けている。夜ということもありそれが
すぐ

には分からなかった。

赤く切っ先が鋭い。一見刃か何かと見間違えてしまいそうなそれは、ファルザー自身の羽根だった。

「まずい」

それが一気に流れ星のように降り注いでくる。刃は岩盤をも貫き、
あちこちをめちゃくちゃにする。しかしその数百という羽根をスバル
は全て避けきつみせた。ほとんどを勤任せの状態だったのにも関わ
らずだ。狭い場所からファルザーも狙える角度が限られてしまっ
ていた

からだろう。

『スバル、このままじゃやべえ!』

見ればグレイガも尻尾から棘のようなものを発射しようとしている。通路においてはスバルの不利はこのまま続いてしまうだろう。

『とにかく広い場所だ! じゃないと俺達もやられたままでデリートされちまうぞ!』

ウォーロックはそう提案したが、スバル達にはこの大学のどこに広い場所があるか分からないでいた。どの方向に何キロ進めば目的地に着くかもわからない。だが進まなければやられてしまう。

「分かった、とにかくここは逃げよう……!」

電腦獣2体、その圧倒的破壊力の前には世界を4度救った英雄でさえ突破口が開けないでいた。それほどの怪物を、たった1人の少年が操っている。

(あの子がどこにいるのかは分からないけど、とにかくまずこの2体を倒さなきゃ話にならない……!)

だが走り出すスバルの背中にグレイガの尾棘がマシンガンのように繰り出される。それを間一髪で避け続けながら、スバルは自分の戦える場所を探し始めた。

『……どうだ、ロックマンは』

覇神の漆黒のハンターV.Gから、1体のウィザードが問いかける。さきほど覇神の周りにドリームオーラを張ったのはこの電波体だ。ウオ

ーロックが攻撃してくるコンマ2秒の間にはもうドリームオーラは張っていた。なぜなら彼にはウォーロックが攻撃してくることがあらかじめ

分かっていたから。

「うーん、どうなんだろうね」

依然鉄壁の守りを外さない覇神は、爆発音などが響き渡る方向を見ながら首をかしげた。深夜ということもあり、スバルと電脳獣が戦

えば周囲に認知されるほど轟音が鳴るのは分かっていた。なので彼は穿城大学の周りに「デイメンショナルエリア」によく似た防壁を設置

したのだ。

「正直期待はずれだな。僕たちの敵にはなりえない」

もともとスバルが一撃で電脳獣を屠らなかつた時点で覇神は落胆していた。何故真つ先に攻撃して決着をつけられないのだろうか、それが彼にはわからなかつた。スバルなら、そのくらいのことにはやってくれるだろうと期待していただけに、これは残念な誤算だった。

「電腦獸くらいは……でもキリユウも難しいか」

『元々俺達の攻撃力があって一撃で仕留められる計算だ。ロツクマン程度には無理だろうよ』

「それでも3分以内にはデリート出来るだろうさ。それが出来ないんだから、本気で残念だよ」

未だに勝負は決していない。爆音の具合からどちらもほぼ無傷という感じだろうか。

『このままだとグラウンドに向かうのではないか？』

「ああ、あの地面しかないところね。たしかにあそこに向かうかね。でも、それで何が変わるのか」

グラウンドというのは遮蔽物が何も無い。広大な面積を有する代わりに、避ける手段がめつきり減ってしまうのだ。遮蔽物を何か作った

としても、ファルザーの上空攻撃で掃射されればそれまでだ。

もちろん上空にウェブロードは通っており、それを利用すれば何かしらの突破口には繋がるかもしれない。そう考えてウェーブロードに

乗った瞬間にスバルの敗北は決定的だ。立つ場所がほとんどないウェーブロードでは、ファルザーの領空権によって確実に競り負ける。

「上空にファルザーがいる時点でほぼ終わりだろうね。グレイガもウェーブロードくらいの高さなら電線ブレスを吐けると思うし」

つまり、スバルが勝つためにはまずファルザーを倒さなくては

けない。それもウェーブロードに上り、悪所で戦ってた。

「でも無理だと思うけど。それこそ空中で戦える翼が無ければ……」

何とはなしに呟いた覇神の言葉に、ウィザードは感情の色を見せないままに呟いた。

『翼なら、あいつが変身すればあるんじゃないのか？』

確かに今のスバルは、エグゼPGMを失って攻撃力を欠いている状態だ。だがもう1つのPGMが今の彼にはある。

「『キングPGM』……デュアルファイナライズ二重究極変身だっけ？」

それならたしかに空中戦に持ち込め、悪所や一方的な攻撃という問題を解決出来る。だが

「攻撃をしていないのにノイズが溜まるとでも？ スバル達は今防戦一方だ。どうせ死ぬさ」

そう。スバル達はいま攻撃には転じられない。どちらかを攻撃しようとしたところで、もう一方に殺されるのがオチだ。

しかし本当にそうだろうか、と覇神は考え直す。自分のウィザードが意見をいったのには、もっとわけがあるはずだ。そして自分はそ

れを考え付くことは出来る。

穿城大学の施設、配置などを思い出しているとある1つの答えが導き出せた。

『結果的に奴らに運が向いたな。……………ふん、どうやら英雄というのはつくづく運が味方をするらしい』

そういうウイザードの口調は、何かかこのことを苦々しく呟いているようだ。だが覇神にとって問題なのはそうではない。スバルがこの

あとどうするかということだ。

「……………勝てると思うか？」

『勝機はあるな。あの2体と戦っても、さっきまでとは違い攻撃の幅も広がる。これで五分五分といったところか』

これでどちらが勝つというのは完全に分からなくなってきた。もしかしたら電腦獣が失われてしまうかもしれない。あの2体は、覇神たち

にとってもそれなりに価値のある駒ではあった。けれど

「……………さっすが英雄」

覇神は笑っていた。この状況が最高に面白いと、これが娯楽だと言わんばかりに。

「暇つぶしのつもりで喧嘩を吹っかけたけど、上等じゃないか。……………いいね、最高だよ。俺もわざわざ出向いてきた甲斐がある」

邪悪なる笑い声が、漆黒の空に飲み込まれていく。星の煌きはどろろにかして覇神を光らせようとしますが、この少年の闇が深すぎて光る

ことなど無い。

「僕たちも行くのか、こんなところで待っているだけじゃつまらない」

『……勝手にしろ』

ウィザードの言葉に満足げに頷くと、覇神はすぐにハンターを操作する。やがて、1つのカード　チップを使用した。

「電波変換CF　覇神黒影　オンエア」

光をも包み込む闇が、覇神の身体を包み込み、最凶の電波人間を作り出す

その頃スバルはだだっ広いグラウンドへと来ていた。

「……これなら視界もいい」

スバルとて何もしないでここに辿り伝いたなら、己の運の悪さを呪うかもしれない。けれど今は違う、彼は変身を遂げたのだ。

赤と黒、2枚の切り札を掛け合わせた変身の名は、ギャラクシーキング銀河の王。ブラザーによって支えられた彼の変身なら、圧

倒的攻撃力と領空権を確保できる。

先ほど大量のノイズが撒き散らされたのは本当に運が良かっただけだ。ファルザーが自身の脚を分離　俺にはスバルとウォーロック

は愕然とした。がたまたまノイズが大量に保管されていた場所を破壊、その結果二重究極変身デュアルファイナライズが可能になっ

た。

『これならあのうざってえ2匹をぶちのめせるな!』

防戦一方であつた彼らだが、今からは違う。今から行つのは、一方的な攻防ではない。紙一重の差で勝敗が決まる、殺し合いだ。装甲している間に地上からはグレイガが、上空からはファルザーがグラウンドへとやってくる。未だにその身体には傷ひとつ無い。どちら

も負傷した傷はゼロ。お互いにまだ均衡を保っていた。しかしこれからはそうもいかない。情勢は刻一刻と変わっていくハイスピードな展

開となつていくだろう。

片や世界を4度救つた英雄、片や200年前の英雄の存在を脅かした電脳獣。戦いとしてこんなにも好カードな戦いが、世界に何個存在

するのだろうか？

『さあてと、これで後半戦を開始してやろうか!』

「うん、行くっ……!」

メテオノイズジェネレーターとノイズウイングバーニアを噴射させ、右手に巨大な漆黒剣を強く握り締めスバルは音速を軽々と声で

突っ

込んでいく。それに対応する形で2匹も応戦する。

だがしかし、この現実を知る人間は誰もいない。あのシルバー・ウインドでさえも、覇神の行動は理解できなかった。

流星と電脳獣、この2体の戦いから始まる物語を、まだ誰も知ることとは出来ないでいた。それは覇神とて同じであり、これから事件を起

こしていく黒幕たちですら、こんなことを把握していなかった。

風がうねる、大地が爆ぜる。そんな次元では収まりきらない戦いが、今ニホン最大の学校で開始される。

・(X・6)話 運は何にでも勝つ(後書き)

感想待ってます

・(X・7)話 均衡はいつしか崩れ行く

「キユオオオオオオオオオオッ！」

怪鳥は音速で動くスバルに対し、音速のパルスを発射した。放射状に広がるそれを、いくらスバルが速くても、その攻撃を避けることは不可能だった。そう、避けることは。

ぶうんと、右手に持つ大剣を正中線に構える。そして左手で刃に軽く触れる。みるみる大剣は蒼いオーラが纏い始め、剣を一時的に強化した。

「ダークネスブレイド！」

蒼いオーラ 高圧縮されたノイズを纏った大剣で見えない攻撃にスバルは剣を振るう。見えないからと言って攻撃できないわけではない。空気の振動、それだけでスバルはタイミングを計ってしまった。

高振動のパルスと剣がぶつかり火花に似た粒子を撒き散らす。ぎりぎりや硬いものとぶつかる感覚を覚えるスバルだが、それを叩き壊すイメージで斬り抜く。

「うおおおおおおお！」

無理矢理に斬り耳に金属音に似た嫌な音が響き渡るが気にしない。これでファルザーの攻撃には打ち勝った。次の手に移る必要がある。2体敵がいるのなら、まずはどちらかを集中攻撃して1体に減らす攻略法が主流である。実際スバルも最初はそうしようとした。だがこの2体はそれをさせてくれるほど楽な敵でもなかった。どちらかを狙えばどちらかに攻撃を阻まれる。そうなれば攻撃しようとする

ることが無駄になる。

ならば、阻もうとする攻撃を利用するのが定石だ。

「ギャラクシーバスター！」

左手を強大な銃口に変形させ、そこからノイズを吸収。秒速数百発まで装填された弾丸を、一気にグレイガへと撃ち出す。溜めも少なく且つ攻撃速度も速いために、グレイガは避けることがままならなかった。

白銀の光弾を受けひるむグレイガに応戦する形で、ファルザーが後ろから小型の火の鳥を出現させる。背中から狙われてしまつては、スバルも出現をとめることは出来なかった。

小さな鳥達はロケットと見間違えるほどに速くスバルへと突っ込んでいく。ギャラクシーバスターを撃ち終えた直後のスバルには、かわせなかった。

「エレメンタルシールド！」

だがかわせないのなら、さつきと同じように防いでしまえばいい。スバルはすぐさま自分の目の前にシールドを創造する。このシールドは属性攻撃に対して無類の強さを誇り、敵の攻撃に対して有利となる属性に変化する。

相手の属性は火、ならばこの盾の属性は水。

火の鳥がシールドに着弾し、それがすぐさま水蒸気となる。白い煙がスバルの視界を邪魔するが、火の鳥が出し尽くされるまでスバルは待つ。盾から感じられる振動が終わるまで。

そして、ついにファルザーの攻撃が終わりを告げた瞬間、スバルはバーニアを全開にさせファルザーのいた方向へと向かう。水蒸気があるのが音速を超えるスピードの前には無いも当然だった。

攻撃直後ということもありファルザーはすぐさま回避には移れな

い。だがそれに対するだけの攻撃も怪鳥には存在する。すぐさま翼を広げそこから無数の羽根を射出する。

音速の羽はスバルにとつて見れば音速の2倍で迫ってくるのだ。避けきれぬはずがない。だが避ける必要は無い。最小限の代償で、最大の成果を上げる。それが戦いだ。

羽根が身体中を引き裂く感覚を脳が訴えるが、スバルはそれを無視してファルザーへと飛んでいく。そして剣を強く握り大きく大上段に振りかぶる。

「ソニックソード！」

音速に達した剣は漆黒に煌きながら怪鳥の身体を引き裂いていく。大学全体に響き渡る悲鳴、それが意味するのはスバルの攻撃が命中したことだ。怪鳥は胸を大きく袈裟懸けに斬られ、傷も深い。その傷口からは濁流のように粒子が噴き出している。

怒り狂ったファルザーはその脚を分離させスバルの身体を引き裂こうとする。だが怒り狂った攻撃などスバルはあたりはしない。バーニアでホバーし最小限の動きで攻撃を避けきる。後ろから攻撃が来ているとも知らずに。

気づけばスバルの頭上には何か巨大な爪が現れていた。瞬間それが分離したグレイガの腕だと気づいたが、硬直によりファルザーの攻撃も迫っていたために防ぐことも出来なかった。

「があああっ」

グレイガの腕が空中にいるスバルを引き摺り下ろすかのように叩き落された。爪ではなく手のひら部分であったために身体が引き裂かれることは無かったが、それでも大きなダメージを喰らったのは間違いない。痛みでホバーもままならないままにスバルは地上へと落下していく。

その隙をグレイガは見落とさなかった。落ちてくるスバルに向かって口を開けると、そのオレンジ色のたてがみを発行させ出したのだ。バリバリ、と電流が流れる音がスバルの耳に届き急いでエレメンタルシールドを展開させる。属性は木属性。

吐き出されたレーザー状の電流はスバルを貫くはずだったがシールドによって中和された。これでひとまずは体制を取り戻そう、そう思ったスバルにグレイガは今度口から火炎を漏れ出させていた。

「……………ッ！！？」

エレメンタルシールドの弱点はその属性の変化だ。今さっき木属性に変わったシールドは、すぐには水属性にはならない。1度しまいそこからまた出したほうが速いのだ。だからすぐにシールドはしまわなくてはいけない。しかしグレイガがその一瞬の行動のうちに火炎を吐くのは明白だ。

『スバル、バーニアを点火させろ！！』

その言葉を理解したスバルはすぐさま反応、落下していく自分達の身体を地面に落下するかのように速度を上げた。そのおかげで炎はスバルたちに命中することは無かった。

このままでは地面に頭から激突してしまいそうになるスバルだが、無理矢理体勢を整えグレイガへと反撃する。

「エレメンタルドライブ！」

ハンターを操作しバトルカードを入力。ヒートアップ。フラッシュスピア、ワイドウェーブ、コガラシを「剣」へと装填させる。

これはヘイト戦では使わなかった業だが、キングがシルバー・ウインドの能力「コンベーション」を擬似的に再現したものだ。バト

ルカードを消費してその分属性を獲物に付加させる、そして今回は4枚同時だ。

リボルバーの弾が変わるかのように一撃斬れば属性は変わる仕組みだ。

「カルテットオブソニック！」

グレイガの頭へとスバルは4撃を叩き込む。火、電気、水、木、全ての属性が叩き込まれグレイガは思わず頭を天に向けた。

（これなら止めを刺せる！）

だが近づいてくる轟音がスバルを静止させた。その正体を分かっているためにスバルはその場から回避した。

突如襲ってきたのはきりもみ回転しながら突進してくるファルザーであった。一体その巨大な身体をどうやって動かすのか疑問に思うくらいに速い。

（避け……きれる！）

あまりの攻撃範囲に回避するのは無理かと思われたが反射的にその突進からは逃れることに成功した。だがまだファルザーの攻撃は終わっていない。外れたと分かったと単にUターンを開始し始めた。もう一度迫り来る怪鳥は、スバルには血塗られたドリルのようにも見えた。地面が割れ、風が逆巻き、何もかもを破綻させていく。

「デストロイレーザー！」

けれどスバルはそれに対し回避や防御ではなく、攻撃をすることに決めた。ノイズジェネレーターがすぐさまその砲身から一気に大

量のノイズを一本の赤き柱のように発射させる。攻撃はほぼ拮抗しているかのように見えた。だがまだファルザーが押し勝っている。

「カースオブアクレイモア！」

途端にスバルの大剣にノイズが注入されていく。ダークネスブレイドの上位互換版、といったらいいのか。さっきの攻撃は剣にオーラを纏わせるのが限界であった。だが今回はそれをはるかに凌ぐ。

ノイズが、剣を膨張させた。長さは5メートル、横幅は3メートルくらいだろうか。もはや巨人が使うかのような武器を、スバルはこちらに向かつてくるファルザーへと叩き込む。

ノイズの刃がファルザーの頭頂部に触れる。電波体であるファルザーにはノイズが毒だ。デストロイレーザーを受けた今その防御力は大幅にダウンしている。傷をつけるには充分だ。

音速で、しかし見るものにとってはゆっくりと刃はファルザーの頭を通り過ぎようとする。その嘴が慣性によってなんとかスバルを突き刺そうと迫ってくるが。スバルは斬ることだけに専念する。

やがて大剣はファルザーの頭を真つ二つに斬り割った。同時にその嘴がスバルへと突き刺さろうとする。しかし、その前にファルザーの崩壊が始まった。

デリートされたファルザーはゆっくりとその巨体を膨大な粒子へと変えていく。膨大な粒子、それがかつて自分が操っていた能力だと今更彼は思い出した。

(エグゼ……………)

彼もこの敵と戦い、苦戦したことだろう。まさか200年後でこの電脳獣が出現するとは予想しなかったであろうことは間違いない。彼はそのことについて手を打っていない。

(……僕がなんとかするよ)

1体は倒した、だがもう1体いる。デリートされていく粒子などもう何の価値も無い。なのでスバルはすぐさまグレイガへと攻撃を開始しようとする。

けれど、振り返ったらグレイガがこちらへと飛び掛っていたところだった。巨大な口がざらりと光っているのをスバルは知覚する。どうやらスバルを丸呑みにしたいようだ。

「……くっ！」

だが幸いにグレイガは跳びすぎていた。大跳躍したせいで狙いが曖昧になってしまったのかもしれない。避けるのはさほど難しくは無かった。バーニアを点火させその口から逃れる。

しかしグレイガはまるで最初からスバルなどどうでもいいようだ。避けられてもそのまま何かに向かって跳んで行く。ファルザーの粒子へと。

「……………なっ!!?」

今更ながらにスバルは気づいた。グレイガが何をしたいのかが。

あの攻撃はスバルを狙ったものではなく、最初からファルザーの粒子へと

とめる暇も無くグレイガの身体がファルザーの残骸と触れ、まばゆい閃光が放たれた。反射的にスバルは眼を覆い隠す。

『こいつぁ、面倒なことになった……………!!』

ウォーロックの言葉を聞いてスバルはゆっくりと眼を開ける。そこにはあり得ない光景が、存在していた。

紫色の身体にグレイガの頭部、背中にはファルザーのものと
思わしき翼が存在している。身体はグレイガよりも一回り以上大きくな
っており、より怪物としてその身体を進化させていた。

合体、スバルも獣化したときに使ったわざだ。だから出来ること
は理解できる。理解できるが、現実にはされるとどうしようもない感
覚が襲う。

「……まだ終わらない、か」

合体したキメラには傷1つ無い。対してスバルは怪我を負って
いる状態でもある。どちらが有利かは一目瞭然だ。さらにさきほどの
2体よりも断然に強い。それを相手にするのは、あまりにもスバル
には酷だ。

『おいおい、何諦めムードになっているんだ？』

だが彼の相棒は違っていた。

『あいつのダメージは、外見としては無傷に見えるかもしれない。
でもな、デリートされたファルザーと、傷を負っているグレイガが
融合したんだ。無傷なわけがねえ』

「……つまり、ダメージはちゃんと負っているってこと？」

『ああ、それも相当なはずだ』

たしかに傷を負っている2匹が融合したのに無傷というのは道理
に合わない。ウォーロックのいつていることには一理ある。

「でも、融合したんじゃないかと強化されたのかもしれない」

グレイガという電腦獣をベースとし、それにファルザーという電

脳獣を付加させれば、ダメージが無いということも考えられる。

『ああああああ、何でそんなこというんだ！ せつかく勝てると思わせようになっていたのに』

どうやらウォーロックも確信が持てないでいるようだ。元々彼の頭でそんなことが考えられるのがおかしい。だが、確信を持ってないのはスバルも同じだ。

「ごめんごめん。ウォーロックがきつと正しいよ」

紫色のキメラを見ながら、スバルは相棒に告げる。

「だから、次は僕たちの本当の攻撃を浴びせる」

『……いくのか？』

「勝負に出たい。僕も体力が怪しくなってきた」

どちらにせよ早期決着しなければいけないのだ。だったら次の攻撃で止めをさせた方がいい。

大剣を構えなおし、スバルは敵を見据える。敵のキメラは、そのたてがみをバチバチと鳴らせ、さらに口からは炎ももれ出ている。尻尾の先もスバルへと向けられており、どうやら最後の攻撃に打って出るようだ。

『最後の攻撃を打ち破った奴が勝つ、か』

最強の攻撃を破った人間が必然的に勝者、これほど簡単な勝敗の着き方はないかもしれない。

『俺好みだぜえ……』

大剣を構えるスバルの耳には、ウォーロックの言葉すらも届かない。ただ攻撃をあてる、それだけを頭の中で反芻する。

夜空の下で風と沈黙だけが支配を始めた。両者は共に動くことは無く、どちらも敵の動きを待っているかのようだ。

剣はただ力みもせず構えるスバルと、いつでも全ての攻撃を開始できるキメラ。その両者が先手を取ることは考えていない。いつ打てば相手の攻撃を打ち破れるかだけを考えているのだ。

何秒経ったのか、それとも何分経ったのか何時間経ったのか、それすらも分からなくなってきたころ。

ついに動きがあった。

先に動いたのはキメラ。さしずめグレイザーといったところかのほうであった。直線状の電線ブレス、放射状に広がる火炎、

さらに音速のバルスを口から同時に発射させ、さらに尻尾からは尾棘を、翼からは羽根を無数に射出した。

「ノイズフォースピッグバン」

「NFB」

「」

それに対しスバルも動く。右手に小さなブラックホールを作り出したかと思うと、すぐにグレイザーへと投げつけた。球体のブラックホールは徐々に徐々に大きくなると、グレイザーの攻撃を飲み込みながら徐々に大きくなって、ついにグレイザーすらも呑み込んだ。次に動くのはメテオジェネレーター、それが容赦なく紅いレーザーをブラックホールの内部にいるグレイザーへと発射される。音とも形容しがたい悲鳴が天空へと轟き、大地を揺らす。

だがそれだけでは終わらない。構えた大剣を持ちスバルは止めを刺すべく突っ込む。グレイザーがブラックホールを破ろうとするのが感覚でスバルには分かる。でも、その前に決着は着く。

「ブラックガイアギャラクシー！！」

ブラックホールごとグレイザーを真一文字に斬り伏せる。鋼にぶつかった感触を手に残しながらも、スバルは倒したと確信した。けれどグレイザーはまだデリートされていなかった。なんとブラックホールごと斬られたのにも関わらず奴の身体はまだ生きていた。もちろんダメージはきつちりと入っているのに、だ。電腦獣2体を組み合わせたものは、あまりにも恐ろしい異物だった。

「でも、終わりだよ」

グレイザーがもう一度スバルへと攻撃しようとするのがスバルには分かっていった。だがもう防ぎもしないし避けもしない。攻撃することも無い。なぜなら、勝負は決してしまっているのだから。

直後、グレイザーの身体を吹き飛ばすほどの爆発が起こった。核爆発、超圧縮されたノイズが引き起こしたそれはかすかに生命を宿していた巨大な電波体の身体を容赦なく散らし、跡形もなく消していく。

背後から起こる地震を感じながら、スバルは思う。これで、電腦獣は倒したのだと。

最後の一粒子まで燃やしていく爆発は、あまりにも強すぎた。どんな輩でも死んでしまおうのではないか。そう思ってしまっくらいに凄まじい。

「僕の、勝ちだ」

・(X・7)話 均衡はいつしか崩れ行く(後書き)

感想待ってます

・(X・8)話 闇は動かない

『さて、電腦獣は倒したが……………』

もともとグレイザーがあつた場所に目を見やりながら、ウォーロツクは校舎のほうへと視線を向ける。グラウンドにはあたり一面にノイズが舞ってしまっているが、今はまだ駆除をしていない。戦いはまだ終わっていないのだ。

「霸神君はどこにいるのか分からないね」

リカバリーを大量に使用し体力をほぼ全回復したスバルも校舎を見やる。だが地上にいるせいで本当にどこにいるか見えない。まださっきの屋上にいるのか、それとももう逃げたのかさえ分からない。しかし、スバルとウォーロツクは霸神が逃げたとは思っていない。電腦獣を操ることが彼の本気だとは到底思えなかった。雰囲気と殺気、そこから予想するにあれば戦いに飢えている。戦わずにはいられない性。^{さが} 霸神からそれが感じられた。

『……………いきなり不意打ちとかありそうだな』

しかし視界の利くグラウンドで不意打ちがあるとは考えられない。ほぼ不可能だ。それに今スバルは銀河王の^{キャラクターキング}状態である。不覚を取るはずがない。どんな高速だろうと、彼のバーニアが音速を超える速度で凌駕するだろう。

「いつでも僕は戦えるよ」

『おっ、そのセリフは俺みたいだな。ようやくおまえも戦いに目覚めたか』

「別にそうじゃないよ」

ただ訊いてみたいのだ。あの銀色の剣士のことを。最近ハマった
くと言つていいほど姿を見せない、あの謎の少年のことを。

「……………とにかく覇神君が逃げていないとは思つ。だから待とう」
『これで逃げたらとんでもない腰抜け野郎だぜ』

思つてもいないことを口にするウォーロックも、依然として臨戦
態勢を解こうとはしなかった。どうやら彼も相当戦いたいらしい。
自慢の爪を防がれたのが癪に障つたのかもしれない。

「誰も逃げるわけが無いだろ？」

突如、暗闇しかないグラウンドに声が響く。慌てて周りを見渡す
が誰もいない。周りの闇からは、何も存在を認められなかった。

『覇神……………!』

「まずはおめでとつと言つておくよ。電腦獣2体を同時に倒すなん
てエグゼにも無理なんじゃないのかな？」

「君もエグゼを知っているのか!」

バーニアを噴射させ空中に躍り出るスバル。だがいくら上空まで
飛翔しようが、覇神の姿は見えない。見えるのはただ闇だけ。

「当たり前だろ? 常識さ。……………そんなことはどうでもいいね、話
を続けよう」

声の出所が分からない。すぐ近くにあるような気もするし、ずい
ぶん遠くにあるような感じもある。学校にあるスピーカーを使っ

ているのか？ と一瞬思索するがそれでは声はとても響くはずだ。だがこの声は、本当に脳に揺さぶるかけてくるようでもある。

「君たちは合格点、といったところだ」

『何の合格点だあ？』

探すのはスバルに任せ、ウォーロックは聞き返す。その間になんとか見つけるのがスバルの役目だ。声を掻き消すほどの噴射音で空を駆け回り、覇神を探す。

「僕たちが君を強いかどうかと判断する点だよ」

だが声はきつちりと聞こえる。聞き間違えることなく。

「本当にいいことだと思うよ？ 一応計画の一部にはなってくれる

よ」

『計画？』

「僕たちの、ね」

覇神が薄く笑ったような気がした。つい数十分までまでに彼が浮かべた笑顔がすぐに蘇る。あの、邪悪そうな笑み。

「簡単に言えば世界を救う計画かな？」

『……………なんだそりゃ』

あっけに取られたウォーロックは思わず聞き返さずに入られなかった。なぜなら、覇神の言葉から世界を救うなどと『正義』の使命が出るとは思わなかったからだ。彼なら、逆に世界を滅ぼそうとするほうがぴったりだ。

「別にさ、僕は別に世界を救うことがいいとは思っていない。ただそのほうが都合がいいからさ」

ウォーロックの疑問に察したのか、あくまで事務的に答える。

「戦いやすいのさ、守るほうが不利だろう？ 君たちも経験したように、何かを守るといことは何かを攻めるより大変なんだ」

まるで彼はどちらでも良かったといわんばかりに。

「だけどゲームというのは有利なほうがつまらない。最初から5点リードしているサッカーやって何が面白いんだい？ それと同じだよ。逆に5点リードされているサッカーは面白いけどさ」

『……戦闘狂か』

「君もそうだろう？」

『……ああ？』

「君も不利だから正義の真似事をするんじゃないのか？」

予想外の質問に思わずウォーロックは絶句してしまう。その沈黙を埋めるかのように覇神は喋り続ける。

「逆境から立ち上がるほうが難しく、大変だ。とても不利。だけど君はそこから立ち上がるうとする。それが、君にとっての楽しみだからさ」

『そうかもしれないな』

「逆に、君は不利だったら何でもいいんだよ。この世界の人間が滅びようが」

『そんなことはねえ』

「何でだ？」

『……』

またしてもウォーロックは口を閉ざす。ここで「それは俺がそう思うからだ」というのは、覇神相手に通じないのは分かっている。だから他の理由を見つけなければ行けないのだ。けれど、止まった時点で覇神の勝ちだ。

「君は電波体だ。この世界の人間が死のうが生きていけるんだよ。スバルとは違って。なのになぜ守ろうとする？」

「それは……………」

「戦う理由が欲しかったからじゃないのかい？」

覇神は確実にこの状況を支配していた。ウォーロックを飲み込んでいた。確実にウォーロックがもう戻れないくらいに、深く泥沼に追いやっていた。戦わずにただ口だけで。

「理由が欲しいからFM星からアンドロメダの鍵を持って逃げてきた。自分ひとりでは勝てないからスバルに助けを求めた。……………」

それが今でもなあなあになっているだけじゃないのかい？」

「そんなわけねえだろ！？俺が逃げきたのは」

「もし、無意識のうちにそう思っていたら？」

「ッ！？」

無意識、人は誰しも持っているもの。ウォーロックが電波体だろうとそれは例外ではない。無意識で何かを思ったり、やらかしてしまふことだってある。

「君は最初から、無意識のうちに戦いを求めていたのさ。なぜならそれが君の最大の欲求だから」

もうウォーロックは反論しない。ただ至高にふける。だが覇神の

声だけはしっかりと聞いてしまっていた。

「それなのに、君は自分で戦いを求めていいと思っているのかい？」

最後の問い、ウォーロックにとっては止めにも等しい一言だった。胸を直接えぐられたような感覚に思わず思考が麻痺しかける。覇神のいったことが真実だと思い込みそうになる。

実際覇神が行っているのはウォーロックを使い物にならなくさせることだ。そしてその延長でスバルとの電波変換を解いてしまうこと。彼は最初からスバルを倒す気でしかいなかった。

「さあ、どう思うんだい？」

もし覇神の姿があつたら問われる前に攻撃をしていただろう。けれど今どんなに探し回っても覇神の姿は見えない。必然的に黙ろうとするが、だがそれさえも出来ない。もしそうすれば、自分がそれを認めてしまいそうで。

「そんなのは決まっているじゃないか」

さっきから声を出さずにいたスバルがようやく声を発する。

「ウォーロックは、結局困っている人がいたら助けてしまう性分なんだよ」

「……………」

「僕の父さんを救ってくれたのも、FM星からアンドロメダの鍵を持って逃げてきたのも、僕と電波変換することになったのも、ウォーロックがそういう性格だからだよ」

「それをどうやって証明するんだい？」

「僕が感じたから」

最後には理論とかそんなのは関係ないんだよ、と彼は言う。

「一年間ウォーロックと一緒にいる僕が言うんだから、間違いない」

確固たる自信を持ち、スバルは言った。彼の答えにはいつぺんの迷いも無く、故に覇神もウォーロックも何もいえなかった。

(……俺は、何で戦うんだ?)

1度ウォーロックは自分自身に訊いた。彼自身が答えを出さなければいけないと、思ったのだ。覇神の問いによって。

(俺は、俺は、何で地球のために戦う?)

戦闘狂だから? それとも世界を救いたいと思っているから? もっと他の理由?

(俺は)

『へっ、馬鹿らしい』

いつもの調子でウォーロックはスバルと覇神へと、自分自身の答えを述べる。これが、本当の答えだと。誰もこれを否定はさせないと。

『そんなの分かるわけねえだろ!』

びりびりと空気が震える。近くにいるスバルは思わず耳を塞ぎそうになってしまった、だがウォーロックは気にしない。

『俺は考えてから行動するタイプじゃねえんだよ。俺は考えるより行動、考えは後付でしかねえ！　もしかしたら戦闘狂なのかもしれないし、善が好きな奴かも知れねえ。だがそれが分からなかるうが、俺の行動は変えられねえんだよ！！』

そうだ、いつも彼は行動を先にしていた。本能の赴くまま、感情が指差す方向に向かっていつも前進していた。

『難しいこと考えさせやがって……………　一体何がしてえんだが知らねえが、俺はこんくらいじゃ揺らがねえ！！』

「……………さっきまで揺らいでたじゃないか」

『あああ！？』

思わずスバルに突っかかりそうになる。だけどそれをまあまあと相棒は止める。これで答えは出したと。

「僕たちは君の質問では崩せない。君がどんな考えをもってウォーロックに質問をしたのかは察しがつかないけど」

「……………いやいや、結構面白いね君たち」

未だ居場所が分からない少年は、しかしまだ悠然と微笑んでいるようだった。

「揺らがない、か。君たちは2人で1つだから、どちらかを揺さぶれば勝手に自滅すると思っただけ……………ふうん、それじゃあどちらかが助けちゃうか。さすが合格点」

余裕な口ぶりのまま覇神は続ける。

「こりゃ、力で見せ付けるしかないか」

その一言で闇が動いたような気がした。いや違う。よじやくこの場所に覇神が現れたというべきか。さっきまでの声はやはり何か細工があったと考えるべきだろう。

これでまだ見ることは不可能だが、この闇の中に覇神はいる。そのことを知ったスバルはもう探すことやめ身体を強張らせた。

「さあ、試験2回目だ」

・(X・8)話 闇は動かない(後書き)

感想待ってます

ツイッターやっています。作品の質問あればよろしくお願ひします

<http://twitter.com/#!/matonaka-seiya>

・(X・9)話 闇は見えない

覇神の試験という宣言、それが戦いの合図だと受け取ったスバルは見えない敵の攻撃に集中した。もう時間は深夜を回っており、さらにあんなに晴れていた空もいつしか雲で隠れていた。本物の闇、今の時代稀有なものであるものだがスバルはそんなことに注目してられない。

(多分、不意打ちをするはずなんだ……)

完全なる闇に覇神は潜んでいて、この近くにいることは分かっている。そして姿を見せないということは闇を利用しての攻撃。スバルは後手に回ることになる。

だがこれが分の悪い戦いだと感じてはいない。覇神が攻撃をした瞬間、覇神の居場所は気配ではれてしまう。つまり覇神は一撃でスバルを仕留めなくてはいけないわけだ。

「バトルカード オーラ」

気を纏ったスバルは、最低でも一撃は防ぐことが出来るはずだ。つまり一撃は確実に防げるので覇神の居場所は確実にばれてしまう。あとはただ覇神が攻撃してくるのを待ち、居場所を突き止めることだけに専念すればよかった。

突如右方向が光った。急いでそちらへとスバルは振り返る。これで覇神の居場所は突き止めた、そう思ったが思わず動けなかった。

スバルへの攻撃は、数十発もの光弾だったのだから。

避けることなど不可能だった。バーニアを噴射させる前に一発はオーラを破壊し、さらに残りの攻撃はほとんどスバルへと直撃をした。

しかし、きつとバーニアが噴射できようがおそらく避けることは不可能であつただろう。それだけの弾幕と速度を、覇神の攻撃は誇っていた。スバルが読み負けたというだけだ。

「スバルッ！」

「大丈夫……なんとか、持ちこたえられる」

そうはいうスバルだが今の攻撃は重すぎた。電脳獣の攻撃を喰らってもまだ動けはしたが、今はもう意識も朦朧としかけていた。それだけの攻撃力。

(シルバー・ウィンドの仲間ってというのは伊達じゃない……………)

あの銀色の剣士と同等、それ以上の實力を持っているのは間違いないだろう。それに読みもいい。今の圧倒的な攻撃により、覇神はとつくに姿をまた闇へと沈めていた。

またオーラを張って攻撃を待ってもおそらく無駄に終わるだろう。また今の攻撃を喰らえばオーラは引き剥がされ、スバルの意識は持つていかれる。

「……次の攻撃は避ける！」

空中戦というのがいたかった。もし地上での戦いならば破壊された地面を使いサンダーオブアースを使い一時的に闇を消し去ることも可能であつたはずだ。

今からそれをしようとすれば覇神の攻撃をもろに喰らうことになり不可能だ。空中戦なら勝てると思っていたスバルの考えが全てから回りしていた。それとも、それを見越してこ戦法にしたのか。

「止まってたら終わりだよ？」

次の攻撃は光さえも無かった。声が聞こえた瞬間には背中が斬られたとしか考えられなかった。音や光、気配すらも消したその攻撃を、黙って喰らうことしか出来なかった。

「あああああああああつ!?!」

普通ソードなら光を発し見えるはずだ。それすらもない、まるで闇に染められた剣があるかのようではないか。

覇神の攻撃がどのようなメカニズムで行われているのかはスバルにはさっぱりだ。だがこれだけは分かる。このままではやられるだけだと。

分かっているながらも、彼は何も出来なかった。なぜならばあまりの痛みにバーニアが途切れ、そのまま彼が墜落を始めたからだ。

重力に付き従うしかない彼に、上空からプレゼントが渡された。それはさきほどの光弾と同じエネルギー弾、思わずスバルはそれが星の光だと錯覚してしまうほどに。

爆発音が鳴り響く。誰かの悲鳴が轟いたような気がした。だが聞こえない。圧倒的爆発が全ての音を消し去り、それが起こったことだけを周りに知らしめる。

もうもうと煙が立ち込め、嫌なにおいが辺りに充満した。地面は割れて爆ぜただけではなく、焼かれもしたようだ。空気が黒く染まり、それからは二酸化炭素そのものの臭いがする。

「あ、ああ」

スバルはまだ生きてはいた。咄嗟にリカバリーを行い体力を一時的に回復したのが良かったのだろう。していなければウォーロックもろともにデリートしてこの世から消え去っていたことだろう。

「……おいおい、弱すぎるだろう」

呆れた声が近くで聞こえる。だがまだ覇神がどこにいるのかまでは分からなかった。

「もうちょっと頑張ってくれよ……これは僕の本当の戦い方でもない。つまり手を抜いた状態なんだからさ……」

(冗談じゃない……)

これがまだ手を抜いた状態？ それが本当ならばいくらスバルが粘ろうが勝負はスバルの敗北でしか決まっていけないだろう。

右手に持つ大剣が重い。きつと振るうことは出来ないだろう。どうせなら一太刀くらいなら浴びせようかと思っただが、それすらも困難な状態だった。

「……別にいいか。1ついいこと思いついた」

まるで子供がお小遣いをねだるときのように、覇神は言う。

「キングPGMを貰うからさ」

「なっ……」

これほどの化け物に、さらにノイズを操る力が加わる。それは無限に無限を足したかのような、想像するのも不可能な数式だ。

「面白そうだな。僕の力にキングPGMが加われば、どうなるんだろう」

最近身に着けた技を想像して、喜ぶ子供のように。純粹、潔白、そうとしか形容の出来ない心。それがただ悪に向いているというだ

けなのか？

いつの間にか覇神が地上へと下りているようだ。スバルへと近づいてくる足音が、ゆっくりと聞こえてくる。どうやら本当にキングPGMを貰う気んでいるようだ。

「想像してみるよ、楽しいだろ？」

足音がゆっくりと近づいてきて、そしてついに止まった。だがスバルにはその姿がおぼろげにしか見えない。しっかりと見えなかった。だがそれが覇神だということは確信が持てる。近くにいと押しつぶされそうに重圧が、今まさにスバルへとかかっている。

「だからさ、くれよ」

「嫌だッ！」

最後の力を振り絞り右手の大剣を敵へと向ける。至近距離からの不意打ち、さらに敵が完全に油断しきった状態でのことだ。当然敵は避けることなど不可能。

なのに、剣は敵に当たる前に止まった。それどころか「砕けた」。刀身が根元からすべて、ばらばらに、ガラス細工のように。

「言い忘れていたね」

覇神はわざとらしく告げる。

「もう僕は電波変換をといっていて、君の目の前にいるのは僕のウィザードさ。そいつは油断も何もないから不意打ちも無駄だよ」

そのとき、スバルはようやく敵を目視することが出来た。目が暗闇になれたというわけではなく、単純に光ったからだ。その瞳が。

血のように赤い。ただ赤としか言えない瞳。それが無慈悲にスバルを見つめている。

「あ、う……………」

怖い、その瞳が。その心の中に何十個もの負の感情を内包しているのにもかかわらず感情を宿さない瞳。感心も、興味もないのに動くそれが、単純に怖い。

さつと手をあげたそのウィザードは、次の瞬間にはもう手をスバルの胸へと当てていた。殴ったわけではない。ただ当てているだけ。

「ぐっ……………うわあああああああ」

なのにスバルは悲鳴を上げた。原因はスバル本人が分かっている。「力を吸い上げられている」。

自分と一体化していたそれが無理矢理に剥がされ、今スバルとウォロックは身体が痛みでしか構成されていないような錯覚をした。それほどまでの激痛。

「第二の試験は不合格だったけど……………仕方ないね」

最後まで居場所のわからなかった覇神は、最後まで余裕のある声で喋る。

「次は頑張って」

その言葉を最後に、スバルの意識は途切れる。闇しか存在しない穿城大学で、彼は最後に意識という闇のそこに沈んでいった。

・(X・9)話 闇は見えない(後書き)

感想待ってます！

・(X-10)話 光が見える

今日もまた太陽が沈み、月がようやく自分の存在を輝かせる時がやってきた。夜空に散った星々もそれに呼応するかのように、ゆっくりと光りだす。

そんな時間帯に黄璃雷伽といえば彼の経営する病院のとある一室に読書を楽しんでいた。どうやら彼は相当な役職についているようで、その椅子や家具、本棚といったものは年代者のアンティークで揃えられていた。几帳面なのか、綺麗に整理整頓された机の上には写真立てと彼が手にしている一冊の本しかない。

黙々と読み進める彼の横顔は、他人から見れば何か不機嫌そうに見えるかもしれない。まだ30代である雷伽ではあるが、その表情は何かと険しい。高齢の老人が気に食わないと感じているときに似ている。しかし別に彼は不機嫌なのではなく、ただ読書するときには顔が厳しくなるというだけの話だった。彼は娘には「ストレスでも溜まっているの？」とその顔を見られる度に言われており、そのため家で読書をするのがめっきり減った。

「今日はこれでよしておこうか」

茶を挟み本を机の引き出しにそっと入れる。中には同じサイズの小説や新書が詰め込まれており、彼が読書家なのが伺える。

ふと彼は窓際に寄り、空が映し出す幻想的なスクリーンを見る。やはり星は綺麗だと、彼が思うしかないほどその光景は美しかった。

「……………そろそろ家に帰りたいな」

病院の院長という立場から、毎日家に帰られるかというところではない。3日か4日程度病院で寝泊りすることなどざらにあった

りする。けれど雷伽は今1週間病院に滞在していた。そろそろ家で暮らしている妻と子供達に会いたくなってきた。

「ホームシックなのか？」

やや苦笑気味に彼は独り言を呟いた。これでは小学生とほとんど変わらない。なにより我が娘より精神年齢が低いではないか。

だが原因はただ家に帰れないからではないのを彼は知っていた。このごろ仕事の量がゆっくりとだが増えているのだ。それも謎の事故、それも重傷、重体患者が多数ということだ。

近年ウィザードというものが生まれ世の中へと浸透していった。それによって世界はもっと便利なものへと改善され、平和な世界になっていくはずだった。だが何かを改善すれば何かが悪化するの道理ということか、ヒールウィザードという存在が人間を襲い始めたのだ。

始めはただ1体のヒールウィザードがウイルスを集め襲うことしかしていなかったが、ここ数ヶ月ではそれも変わってきていた。ヒールウィザード達は少ないときは10、多いときでは50程度の数を集めて人間を襲うようになってきたのだ。

政府は隠匿しているが、既に死者も出ている。黄璃はその被害者にも実際会い、看取つてもいた。だからその人が死んだ、という事実が消されたようで辛かった。何故隠すのだろう、すぐに公表して対策を講じればいいのに。

それが分からないからこうして隠匿しているのは雷伽にも分かっていたが、どうしようもなかった。彼の経営する病院は世立、世界から資金を出されているが母国からの割合が一番大きい。そのため彼は国には逆らえない。彼はあくまで脆弱な一般人に過ぎないのだから。

「どうにか対策はしてもらいたいが……………はたしてやってくれる

かどうか」

彼は政府を信用していないわけではないが、この『波』が一筋縄でいかないことを予想していた。あまりにも水面下でことが起きすぎているのだ。メテオGの1件で紅き流星のことが表では注目されたが、それと同時にヒールウィザードの活動も頻発化していた。

ヒールウィザードというのは、はぐれウィザードとも言い換えられる。捨て犬と一緒に、オペレーターに用無しと烙印を押されたものが大半だ。しかしメテオGの1件の間にヒールウィザードが激増したというのは無関係なはずだ。一部の人間は「メテオGのせいでオペレーターの精神が緊迫化、それにウィザードとの何らかのトラブルにより感情に任せ捨ててしまう」と的外れなことを言っている。不安定な世の中なのに傍にいてくれる存在がいれば心強いのにそんなことが起きるとはあり得ない。

誰かが糸を引いている、雷伽はそう予想していた。しかし彼の予想はメテオGの黒幕だった。だが今その黒幕は存在しない。つまり糸を引くものは他にいるということではないだろうか。

この激動の時代に、世界を滅ぼそうとする輩が。

「小説の読みすぎか」

自分で考えておいて雷伽はそれを否定した。想像というよりも妄想に近い。

「とにかく政府には何とかして事態の沈静を図ってもらうしかないか」

結局彼には事態をどうしようなどということとは出来ないのだ。凡人ゆえに。いや、凡人だからこそ彼には何も出来ない。

《 院長 》

右手に装備しているハンターから声が聞こえた。聞きなれた看護婦の声だ。

《 星河スバルが眼を醒ました 》

「 …… そうか 」

ようやく彼の仕事が終わってきたらしい。凡人の、普通の人間には出来ない仕事。彼に出来るのはそれだけだった。

「 今から行く 」

見えるのは全てを押しつぶす黒い泥のようなものだった。

それは人を含む動物、家、自然を飲みこみながら進んでいく得体の知れないものだ。濁流とも形容していい何かは、ただ己が流れに従ってただ一掃していく。

傍観者であるスバルには、それが何なのかは正確にはわからなかった。ただ言えるのはこの世には無いもの、あつてはいけないというだけもの。

泥は『空間』に亀裂を造り流れ込んできているようだった。テレポート？ という言葉が浮かび上がるがそれとも違う気がする。単純に泥が空間を引き裂いただけなのだろう。

常軌を逸したその光景にスバルはただ呆然と見ることしか出来なない。生き残っている人間を、あるいは生命を助けようなどとは思えなかった。助けようとすれば、自分も飲まれてしまうことが明白で、生き残っている生命がないことが分かっていたからだ。

泥はこの世の全てを飲み込んで、けれどまだ量は増えていく。それは地球では物足りず、宇宙全土すらも飲み込みたいのかもしれない。

「……………そういえばここはどこだろう？」

スバルは今上空にいた。高度何キロと聞かれてもきつと分からない。それとも宇宙から見ているのかもしれない。分かるのはただ地上よりもはるか上というだけ。

泥を傍観するしかないスバル。そんなスバルさえも飲み込もうと泥は高さを増していく。

やがて泥は、人の手のような形になりスバルを掴んだ。圧倒的な力でスバルはそれを振りほどけない。彼はただ惨めに泥の中へと引き込まれていく。泥の溺れ、租借され、彼は最後にはいつぺんの欠片も残らずに泥の一部となった。

「……………」

気づいたら彼はベッドに横たわっていた。何度かこの展開に遭遇しているために、真っ白な天井が病室であるという事は理解できた。反射的に体を起こそうとして激痛が全身に駆け巡るのはお約束だろうか、苦悶の表情を浮かべ寝台に体を預ける。

「……………僕は」

『 覇神に負けて気を失っちまったんだよ 』

声が聞こえたのはいつもの右腕からではなく、ベッドの横に設置されたテレビからだ。どうやらハンターと接続されているらし

く、ウォーロックはそこに映っていた。

「傷は大丈夫なの？」

「……ああ、なんとかな」

スバルがさほど心配そうにしなかったのはウォーロックの元気な姿がテレビでしっかりと見ることが出来たからだ。もしそうでなかったら、今頃焦燥の色を濃くし慌てふためいているはずだ。

「そう……ごめんね、負けて」

「いや、俺の責任でもある。それに、今回は敵が強すぎた」

その言葉にスバルは思わずウォーロックを見やった。このウィザードが自ら敵が強いということは稀である。それもこんな素直に。

「……言い方は悪いが、今回は負けて正解だったと俺は思っている。俺達が弱すぎたから見逃してくれたのかもしれない」

「自分の障害にはならないからか」

「ああ、そうだ。だから今回は運が良くて、命があってうれしいと喜ぶべきだ。……残念ながらな」

彼とて負けるのは悔しいだろう。今すぐ覇神のところに行ってぶっ飛ばさなければ気がすまないだろう。しかし昨日の負けを思い出し、その気持ちも萎える。今度こそ殺されるだけだと彼だって理解していた。

「だから気にするな。……損害は大きかったけどな」

「損害？ 何かあったの？」

初めてスバルは焦りを表に出した。もしかしたら自分の相棒に何

かあったのかと。

けれどウォーロックはそうではないと首を横に振る。

『損害つてのはだ、キングPGMのことだ』

「……………え？」

『消されたな。それとも盗まれたのかもしれない。どちらにしろハ
ンターからは消えてるぞ』

意識を失う直前に、たしかに覇神がそんなことをいつていたよう
な気もする。

「つまり……………」

『俺達はもう戦える切り札がない』

あの化け物相手に、キングPGM無し。あつても適わなかったの
に無かつたらどうなるかは火を見るよりも明らかだ。結果はただ死、
それしかなかった。

「……………起きてから時間経つてないから混乱している」

『悪かつたな。ゆっくりしていいぞ』

その落ち込み具合から、ウォーロックもどうやらスバルと話す気
力はほぼ皆無のようだった。彼もそのことを知ってから憂鬱だった
に違いない。自分達が負けて、切り札が消えてしまったことを理解
し、きつとこれからのことを考えて絶望しているのだ。

沈黙が病室を支配する。WAXAの病室よりも整然とされた部屋
にはあわない空気、重苦しさだけが2人を支配する。

2人ともそれ以上は会話をしようとは思えなかった。まだ負けた
シヨックから復帰できていないのが大きい。それに疑問を整理する
時間も欲しかった。

覇神はシルバー・ウィンドと繋がっている。覇神は世界を救う何らかの計画に加担しており、その一環としてスバルと戦った。

言葉で書けば分かるが、どうしても腑に落ちない。スバル達には圧倒的に情報が少なすぎる。

何か情報はないかと、思索しようとしたとき、ふいに音が聞こえないほど高性能な自動ドアが開いた。

「やあ」

入ってきたのは、スバルの年から見れば中年で、しかしやけに生き生きした医者だ。顔は白くニホン人離れしていて小奇麗という言葉が合いそうだ。

「容態はどうだね、星河スバル君？」

入ってきた人間と、スバルは初対面ではあった。けれど知らないわけではない。最高峰の医師と銘打たれたその人間を、二ホンで知らない人間など恐らくいないだろう。

黄璃雷伽 40にも達していないその若き男は、その腕もさることながら、医療制度に深く関わっていることでも知られている。度々二ホンの医療制度の無駄を省き、抜本的にしようとしていることがマスコミでも大きく取り上げられている。

そんな有名人を目の前にして、スバルは言葉が出ずにいた。ここがどんな病院であるかなど目覚めたばかりの彼が知らないのも当然だ。院長として現れた雷伽を見て、呆然する以外に何が出来るというのだろうか。

「……………あれ、君星河スバル君じゃないのかい？」

二ホン人にしては白い肌をした医者は、返答しないスバルに対し困惑した表情を見せた。

「い、いえ、星河スバルです」

「うん、よかったよかった。ここを案内した看護師が間違っていたのかと思ったよ」

一転して柔和な表情を浮かべる。人懐っこい顔といえれば想像が出来るかもしれない。取り立てて端正な顔とまではいなくても、20代のころはよくモテたのだろうと予想できる。

慣れた手つきで右腕に装着されたハンターを操作し、雷伽は椅子を物質化させる。形としては木造なのだが、中身はやはり電波で出来たものだ。

「っと、ごめんごめん。君が驚いたのはいきなり見知らぬ他人に話しかけられたからだろ？ 私の名前は黄璃雷伽というんだ。この院長をやっている」

「え、いやあの、その……知らないなんてことはありませんっ。雷伽先生のごことは僕でも知っています！」

ひっくり返った脳みそを急いでどうにかして答えるものの、やはりおかしなセリフだ。どうやら有名人を目の前になるとスバルは極度に緊張してしまうらしい。余談だが彼のブラザーにはトップアイドルがいるのだが、何故か緊張しないのは何か理由があるのかもしれない。

「そうかもしれないね。覇神コーポレーションと私は結構争ったからね。知らない人は、まずいないか……」

照れた笑みを浮かべながら雷伽は何でもないようにいうが、しかしスバルは内心冷や汗を掻いている状態だ。その話題を本人の前で出されることはあまり好ましくなかった。

そう、別に医療を抜本的に変えようとしていようが雷伽の名前を全国に轟かせるわけではない。もっと他の理由がそこには存在していた。それが二ホン最大の企業との争い。表向きには交渉の決裂だ。

何の交渉のせいで覇神コーポレーションと争いが起こったのかは未だに有耶無耶だ。ただ分かっているのはマスコミは全て雷伽の敵に回ったということだけだ。マスコミは判然としない理由を大々的に報道し雷伽。黄璃病院をバッシングし続けた。それも三ヶ月間という長い間。

とはいってもそれはもう一つ大きな出来事によってあまり意味を為さなかっただろう。FM星人襲来、企業と企業ではなく星と星の

争いに視聴者は目を奪われ、結果的にバッシングなど何の効果もなかったという話だ。

結果的に雷伽の病院は霸神コーポレーションの一部になってしまった。けれどその会長、霸神夜月よるつきが突然死を遂げてしまった。跡を継いだ長男は雷伽を同行することもなかったという。

以上がスバルが知りえる黄璃雷伽の情報だ。

「……………」

「ああ、ごめんごめん。口を閉ざさなくても良いよ。ちゃんと私はこうして五体満足で生きているわけだし、何か奪われたわけでもなかったからさ」

無理に誤魔化そうとしているのは明白だったが、スバルは言及しようとはしなかった。

「で、そろそろ頭が回ってきたと思うけど大丈夫かい？ まさか記憶障害が起こったというわけではないだろう？」

「大丈夫、です。何か以上があるわけでは……………」

「体は一応絶対安静だから無理して動かさないでね。重傷だからさ、君」

突然、雷伽からはさっきまでの人懐っこさが消えた。

「……………ッ」

思わずスバルは息を呑む。一瞬だ、一瞬で雰囲気さがらりと変わった。さっきまでは芝居なのではないかと思ってしまうくらいにその表情は「無」であり、思考が読み取れない。

そう、スバルは緊張していたのは別に有名人だからとかそんな理由ではない。彼の事情を知っていれば分かるが、雷伽の上司はあの

覇神黒影なのだ。

つまり、雷伽も覇神の刺客なのかもしれない。

そういえばと青いハンターに目を向ける。そこではウォーロックがいつでも外に出れるようと身構えていた。つまり彼は知っていたのだ。覇神が上司にあたるかは知らなくても、雷伽がただものではないことを。

ならばスバルも油断することは出来ない。何気なく瞬きした後にはナイフを突きつけられたなどということが、ありえないわけではないのだ。

「校庭で気絶していたようだけど、あれはどういうことかな？ 君は穿城の生徒ではないはずだけど」

からつぽな黒い瞳が、スバルを覗き込む。

「……………先生は、僕の正体を知っていますか？」

当たり前前のことをスバルはあえて聞いた。ここは勝負どころだ、無理にぺらぺらと喋るより、相手に喋らせるほうがいい。機械のような人間だからと言って何か情報が得れないというわけではない。

「世界の英雄ロックマン、でしょ？ それがどうかしたのかい」

「ならあとは想像で察することが出来ると思いますが」

「私は想像力が乏しくてね、分からないよ」

あくまで雷伽は平淡な声で訊いて来る。それにあわせてスバルも声色をひそめた。

「……………街を巡回していたらウイルスが穿城学校に現れたんで、退治していたんですよ」

「それで研究所を8つ破壊か。凄い戦いだっただんたろうね」

「……ええ、大変でしたよ」

「それは 黒かったかい？」

喉が干上がる。思わず目を見開きそうになる。だがスバルは必死になつて表に出さなかつた。

こんな質問をしてくるといふことは覇神から何か聞いているといふわけではない。つまりあくまで予測して、それをあくまで訊いているに過ぎない。だから硬くならずには答えればいいはずだ。

「どうだつたでしょうか、建物の影でウイルスの姿かたちはあまり見えませんでした」

「校庭にいったんだから、そこでは見えなかつたのかい？ 昨日は月がよく見えただろう？」

腹に鉄板でも乗せられているかのような重圧、それを必死でこらえる。

「……残念ながら、校庭にいったのはただの探索です。途中で見失つて、それで見晴らしのいい場所に移つたんです。そこで」

「そこでやられた、というわけか。なるほど、中々の強敵だったようだね」

さして興味もなさそうに呟く。どうでもいいのか、それとも何か考え事をしているのか、ただ訊いてみたただけなのか。

「天下のロツクマンを倒すなんて、そんなウイルスがいるとは……」

……また何か起こるのかもねえ」

「いや、でもそこまで脅威だったとは思えません。今はサテラポリスだつて戦力が充実しているし、WAXAも協力して」

「200年前に暴走した電腦獣2体が現れるなんて異常だ。それもただ暴れているだけなら分かるがあまつさえ操られている。それを御すだけの力を黒影君は持つているわけか。たしかに彼なら可能だろう。なんてつたつて彼の精神力は異常だ。それでいて頭脳明晰。あの子なら電腦獣を操るなんて、朝飯前なのかもしれないね。」

それでも穿城で戦うなんて馬鹿な真似をしてくれたもんだ。そう思うだろうか？ 研究所の密集地で戦うなんて、それも本気の戦いをするなんて、正気の沙汰とは思えない。そこはまだ小学生といったところなのか。はたまた自分の敷地だからどうとでもあると思ったのか。

けど彼はならディメンショナルエリアの改良版やRWタワーなど展開することなど造作もなかったはずなんだがな。それをしないとというのは何か理由があるはずだ。面倒くさがりというわけではない。少なくともあの子のウィザードが主導権を握っていないのであればそのはずだ。今は彼が完璧に従えているのだから。

そうするとなんでだろうね。ギャラクシーキングの力を拡散させて被害を計算させたかったのかな？ そうすればたしかに自分が使うときにどうすればいいかがわかるから、そうする必要があったかもしれない。でも頭だけで計算することを、わざわざ見る必要があったのか。電腦獣2体を消費してまで。

いやもしかしたらこう考えられるかもしれない。スバル君の戦力を奪う代わりに電腦獣2体を消費することで「等価交換」とでも思った。ならたしかに電腦獣は消すべきだ。

でもそんなことをするほど霸神君は少年漫画の主人公だったか。いやそうじゃないはずだ。あの子ほど物事を冷静に考え損得でしか勘定しない人間だ。うん、そうだ。ならなんでそんなことをした？ そのところ分かるかい？ 直接戦ったスバル君」

言葉、言葉、言葉。音、音、音。それがスバルの声や思考を全て塗りつぶしていく。洪水と比喻するべきか、それは圧倒的な破壊力

で見えない何かを壊す。

言葉だけを紡ぐ機械、もはやそう表現するしか黄璃雷伽を表すことが出来ないだろう。それほどまでに異常だ。スバルにとって異常とは強さの上限でしかなかったが、これはまた違うものだ。歪で異質だ。何もかもが違う。

「ん？ どうして黙っているのかなスバル君。黙ることなんてないよ。すぐに喋ってくれたまえよ。僕は聞きたいんだ、覇神君がそんなわけの分からないことをしたのが。分からない分からない分からない。理解出来る範疇には収まらない。そうだろう？ 仲間よりも自己を優先し続け、それについて何一つわびることもない。1000の利益のために99を犠牲にすることに何のためらいもない。1000の利益が欲しいがために99人を殺すような奴だ。それが、何故電脳獣を消費してしまったのか。

ストックなどあるのかな？ それならまだ救いはあるかもしれない。消費してしまってもまた補充すれば良いから。それならべつにいい。

でもそうじゃないはずなんだ。あのビデオを見た私なら分かる。あの子はあるとき『ぶっ飛んでいた』。損得などどうでもよくなっていたんだ。まるで楽しい遊戯でも見つけた子供のようにとも言えはいいのかもしれない。

でも君がかい？ 『ストーリー』を知ったのだってつい最近だった君に、それを覇神君が感じたというのか？ ありえるわけがない。そんなの断じて認めていいわけがない。君だってそう考えないのかい？ 君だって、少なくとも覇神黒影という人間を見て戦いに熱くなるタイプだと、少しでも感じたかい？ 思わないだろう？ 思うはずがないんだよ。

会った人にナイフや氷、闇を想像させる彼にはそんなことがあっていいわけない。うん、何度でも言う、あり得ない。

ああこの気持ち悪さを払拭させる答えが欲しい。どうにかしてく

れよ、ねえ。知りたくて知りたくてどうすればいいかわからない。君に聞くことでしか、私はこの問題を解くことができないんだ。損得勘定冷徹氷闇利益犠牲優先電脳獣戦い熱い研究所等価交換人間被害完璧計算消費補充黒影少年漫画主人公本気頭脳明晰異常馬鹿敷地改良版展開冷静物事何故優先理解範疇

壊れていた。スバルから言わせればこの雷伽という人間こそ『ぶっ飛んでいた』。人ではない。機械、いやそれよりもおぞましい。人ではない『何か』

「う、あ……………」

それが怖かった。臓腑がねじれきれてしまうのではないかと思うくらいに痛みを発している。胃の中のものなどないからか、胃酸が胃事態を溶かしているのかもしれない。

血が凍った。あまりの体の冷たさに死んだなと勘違いしてしまうくらいに。気持ち悪い、すぐにここから逃げ出したい。でもここから逃げるにはこの人ではない何かを

『ビーストスイング!』

ハンターから無断で出たウォーロックは容赦なく雷伽の身に爪を振るった。轟と風が唸り、そして雷伽の柔らかい身を引き裂いた。

本当に一瞬だ、本当に一瞬で雷伽は細切れになった。まるでそうなるべくして作られたかのように、跡形もなく消えうせてしまった。粒子一つ残すこともなく。そこから中に血を残すこともなく。

え？

それはあり得ない。人間が引き裂かれたら血が出るはずだ。脳漿が噴出すはずだ。目玉が飛び出して内蔵が零れ落ちるはずだ。土砂物が撒き散らされスバルやウォーロックの体を濡らすはずだ。けれどそうではない。実際雷伽を引き裂いて出たのは粒子、それだけだ。人間などではなく、最初から電波体。

「はいはいこんにちは」

いつの間にか開いたドアから現れたのは長い黒髪の少女だった。背丈はスバルと大して変わらないがその顔つきが少しだけ大人びているように思える。手に持つのはフルーツバスケット。誰かの見舞いらしい。

「うん、別に君のウイザードは正解だよ。それはうちのお父さんじゃない、あくまでマネキンみたいな感じ」

よいしょ、とさつきまで電波体が座っていた椅子に座る少女。けれどスバル脳内処理は限度をはるかに超えて魂はどこかへ旅立ってしまうのではないかというくらいにおかしくなっていた。

「そうそう、それでいいよ。私は人を驚かすのがすきでね、スバル君のあほ面は嫌いじゃないよ」

くすくすと笑う少女に邪気はない。ただイタズラをしたときの悪がき、としか見えない。事実そうなのであるうが、外見からは大人しそうな少女がこんなことをするのは意外だった。

『……光、訳分からないお持て成しで相手は困っているようですが』
「あ、そうだね。ごめんごめん。別に悪気はなかったんだ」

そう笑う少女は一輪の花のような可憐さを持ち合わせていて、それはスバルが知る対極に位置する人間だっただろう。

『……………てめえは、誰だ？　こんな趣味の悪いことをしやがって』

困惑しきったスバルに変わってウォーロックが尋ねる。

「え、私？」

その質問が意外だったのか。少女は少しだけ目を見開いた。だがそれも少し、次の瞬間には落ち着き払った声で答える。

「黄璃光、覇神黒影の友人だよ」

- (X-11) 話 院長・黄璃雷伽(後書き)

やあ、今回の話を謎と思っただ方。僕自身も謎だ

簡単に言えばいろいろ頭こんがらがりました、はい。

・(X・12)話 少女・黄璃光(前書き)

遅れてすみません、このごろちょっと忙しくて……

・(X-12)話 少女・黄璃光

「友人、だあ……………？」

ウォーロックは突如現れた光という少女に対しきつい視線を送る。覇神黒影の友人、そんな人間に対し友好的になれるほうがおかしいだろう。

その視線に対し、光はあくまで穏やかなままだった。最初から争う気などないのだろう。実際彼女の腕にはハンターが装着されていなかった。覇神のウィザード並の周波数が近くにあればウォーロックだって気づく。今のところ、近くに強大な敵はいない。

「性格には知り合い、っていったほうがいいかも。友人というくらいには温かい関係じゃないし、かといって仲間というほどキズナもない。前は敵ではあったけど、今はそうでもないしね」

そういう少女の口調はまるで友達に話しかけるようなものだった。スバルとウォーロックとは初対面のはずなのだが、そんな気後れなど感じさせない。誰とでも仲良くできる、光からはそんな印象を受ける。

「ちよ、ちよつと待って！ さつきから何が何だか」

「さつきの私のお父さんっぽい人は偽物なの。電波で構成された、ええっとコピーロイドって分かる？ それに似たようなもの。人格と容姿を設定すればその人のような『別物』が出来るってわけ」

くすくすと光は笑う。しかしほんの冗談にしては悪すぎるものだった。なにせ大の大人が粒子と化して消えてしまったのだ。驚かすにはいられない。

「だから気にしなくて良いよ。君のウィザードは殺人をしたわけじゃない。ただおもちゃをデリートしただけ」

『けどなんでそんなことをした？ そんなことをする理由が見つからねえ』

「君達がそれを言うかな？ 赤の他人を救う君達が」

『許せねえかだよ』

「感情的なんだね」

ヒーローってそんなものなのかもねと光は付け足す。しかしスバルは未だ原状をつかめないでいた。何故ここで覇神の友人と名乗る少女が現れたmのか、その理由が定かではないからだ。

「いやあ、最初の出会いは忘れられないくらい印象的なもの良かった」

光はその疑問に親切に答えた。なんともよく分からない少女だ。

『おい、光とかいつたか？』

「そうだよ、そういう君はウォーロック？」

『おまえ、何しに来たんだ？』

青きウィザードはつまらない茶番には付き合ってられないとばかりに答えを訊く。ウィザードがいない今、光が殺される可能性は高いと踏んでいたはずだ。なのにここに来た。その理由が不透明で、さらに謎の少女ということも相まって怖かった。

「何しに来たって、噂のヒーローをこの目で見たかったってこといいんじゃないの？」

『そうは思えねえな』

「僕もそう思えない」

2人に同時にいわれてしまう。スバルとウォーロックの警戒心は尋常ではない。ウィザードがいらないからといって何か他の攻撃しゅだんがあるのではないかという懸念があっては、満足に話すことでも出来ない。

「えー、それで納得してよ」

しかし口を尖らす光に何か他意があるとも思えないのは事実だ。奥が深そうで浅そう。何か考えてると見えて考えていなさそう。簡単にいえばそういうことだろうか。

「理由がなければ納得しない人なの？」

「……………君がどんな人なのかいまいち掴めないからね」
「そうなの？」

少し意外とばかりに光は目を丸くする。

「理由なんて後付だと思うけどな。その現象が起こったことは変わらないんだから、別にどうでもいい気がするけど」

「それは科学者にいつたら怒られると思う」

「じゃあ私が言ったとしよう。でもそれを君たちは真実だと受け取るのかな？」

意地の悪い、答えを知っているが故の問いを、彼女は行った。邪悪さはないものの、その瞳には玩弄したいという思いが込められていた。

「……………分からないよ」

「私はそんなこといっても何か変わるわけじゃないんだから、気にしないでいいよ。……………ま、一応答えるよ。用件は覇神君からの言伝ってことでいいかな？」

その瞬間、スバルとウォーロックは思わず体が硬直した。先ほどとは違い瞳は恐怖と探究心がそこに映っている。それほど彼らは今覇神黒影という少年の情報が欲しかった。

「『もう少し強くなきゃヒーローとは名乗れないね』、だってさ」
「……………あいつは俺たちのことを舐めているのか？」
「うん、そうかも」

苦笑い気味な光の表情。どうやら舐めているらしい。だが昨日のバトルの結果からしてみれば舐められても不思議ではない。実際、スバルは覇神とは勝負にすらならなかった。

「覇神くんは嫌な人だからね。こんな皮肉なんていつもいつているから、気にしなくて良いよ」

沈黙の意味を間違えているのか、スバルはよく分からない人に慰められてしまった。

「そんなに落ち込まなくても良いよ。覇神くんが強いのはいつものこと。君達が弱いわけじゃない」

「……………慰めているつもりか？」
「一応は。ただ私はそのときの戦いを見ていないから、何とも言えないっていうのが本音かな」

校庭が吹っ飛んだことくらいだよ、私を知っているのは、だそう
だ。

「君達も元気なのは良いけどそんなに本気で戦わないでよね。一応私のお父さんの職場でもあるんだから。潰れちゃったら私の家屋が貧困しちゃう」

「……………光さん？」

スバルが光を見て

「なんで、君は覇神くんと知り合ったの？」

いたって単純な質問をした。

スバルには何故こんな人のよさそうな光が覇神と知り合いなのか分からないかった。そもそも彼女の立ち居地が分からない。敵なのか味方なのか、それともどちらでもないのか。本当にただ会いに来てただけなのか。

「君みたいなのが、その、こんな裏の事情に関わることなんてないと思うんだけど」

「……………へえ、君って結構そういうところ気にするよね」

「え？」

「私を敵か味方か判断したいんでしょう？　けど私がどんな立ち居地に立っているから分からない。……………うん、それをはっきりさせるところだよ。『まだ分からない』」

楽しそうな光の横顔、それにスバルは一瞬気圧された。堂々と宣言するその態度、他の人間が光と同じことをいっただら中途半端だと罵倒することだろう。しかし光がいうと違う。その言葉がに、何の意見も差し込めない。

「……………ついでに言えば覇神くんと知り合ったのは、ほら覇神コ

「ポレーションと喧嘩したとき。あのときに軽い知り合いになったんだよ」

悠然と笑うその笑顔は、あまりにも小学生離れしている。格が違う、スバルの脳裏にそんな言葉が過ぎる。

「どう？ これで一応君の質問には答えたよ？ 他に質問は？」

「え、いや、えっと」

「俺からはあるぜ」

オペレーター
主人と違ってウォーロックはまだ何かあるようだ。ウォーロックも光がどんな人間かはつかめてきているはずだ、それなのにまだ質問があるということは、スバルとは違う考えがあるからだ。

「おまえ、キリユウを知っているよな」

質問ではなく断定して、ウォーロックは訊ねた。そこには肯定以外の何ものも許さない意志が含まれていた。

「うん」

けれどここまで淡白な答えが返ってくるとは誰も予想しなかった。

「あつたりまえじゃん。覇神くんの知り合いでキリユウを知らないつてのは、またおかしな話だとは思っけど？」

何ともなさそうに告げる光。そこに嘘など紛れ込んでいるとはとてもじゃないが思えない。だからこそスバルとウォーロックは分からない。

光が何を考え、何のために行動しているのかもそうだが、『どこ

まで光は知っているか』だ。

キリユウを知っているということは、エグゼのことも知っているかもしれない。もしかしたらそれ以上のことも

『キリユウのことについて話す気はねえか？』

「……………一応ないよ」

少しだけ考えたのは、キリユウとの関係がそこまで深いわけじゃないのか。キリユウの話題になってからは少しだけ光は不貞腐れたように見える。

「私自身のことなら話すけど、それ以外の人については話す気はないよ。ごめんね」

『……………どうしてもか？』

「うん、どうしても」

『それは脅されてもか？』

「なっ、ウォーロック！」

スバルが静止するよりも速く、ウォーロックは動いていた。光が瞬きをした次の瞬間には、首に爪を当てられいた。少女の皮などたやすく切りさくウィザードの爪が。

「……………ここまで手荒いとは思わなかったな」

『んで、どうするんだ？ 話すのか？』

冷静な光の対応を制するように爪が皮に食い込む。まだ皮は切り裂いていない。ほんの絶妙な力加減で、ウォーロックは脅迫をしていた。

「なにをしているんだよ！」

『悪いがこいつからは訊きたいことがたくさんある。……………最低なやりかただけど、今回ばかりは許してくれ。俺もこんなやり方はやるべきじゃねえって分かってんだ！ だけどキリュウの情報を手に入れるにはこれしかねえ！ あいつが、何を企んでいるか分からねえ。ひよっとしたら俺たちの、世界の敵かも知れねえ野郎だ。街が荒れ果ててからなんとかしようとしてもおせえんだよ！』

ぎろりとその紅い眼が光の漆黒の瞳に向けられる。だが光は恐れることなどなかった。やせ我慢しているわけではなく、本当に、心のそこから恐怖していなかった。

「……………そんなに怖いの？」

だから彼女はただ疑問をぶつけるだけだ。

「キリュウが、怖いの？」

『ああ、怖いね。少なくともこんなこととして対策を練らなくちゃいけないくらいには』

「……………そう」

その答えに、どんな意味があったのか。

「それじゃあ私には届かない」

最初に起こったのは閃光。まばゆい光は一瞬にしてスバルとウォーロックの視界を奪う。次に彼らを感じたのは音だ。形容しがたい、何の音かも分からない奇妙なそれが部屋中に鳴り響く。

そして次に感じたのは、ウォーロックが倒れた衝撃だ。

「……………えっ？」

視力を回復して部屋を見たスバルはただ口を開けることしかできなかった。平然とたっている光の足元に自分のウィザードが気を失って倒れている。そんな当たり前前の事実が彼には理解できなかった。

「脅すのは確かによかったかもしれないね」

その好印象な、いつも通りの口調で黄璃は言う。

「ただ私の病院でそんなことをしちゃいけない。小学生って言ったって、一応自衛のためのことはするんだよ」

見れば天井からは一つの銃口がウォーロックに向けられていた。

あれが、あれがウォーロックを一撃で気絶させたものなのだろうか。

天井を呆然と見つめるスバルに、光は語り聞かせる。

「だからね、私にそんな簡単に武力行使しないでね？　ここでは、君達はいつでも倒される存在なんだから」

スバルと光が出会っていたとき、覇神黒影は自分のオフィスにいた。

小学生にしては大きすぎる机 無論リアルウエーブだ には膨大な数の資料が散乱していて、さらには床にも転がっていた。どうやら勤務中だったらしい。

けれど多くの人間が見たら彼の仕事場はいささか時代遅れのように思えた。資料などというのは今やハンターV Gに入れてエアディスプレイで見るとは、世界が誇る覇神コーボレーシヨンの社長とは思えなかった。もちろんそれには事情があつて、彼がただ単に紙を好む性質からだろう。それが何故なのか、この会社で知るものは側近しかないのだが、ようはずっと彼は本に埋もれて生きてきた。今更エアディスプレイでどうしようよなどとは思えないのだ。

その点でいえば、彼は前社長と似ているところがあつた。

「……………しかし、ねえ」

覇神は膨大な資料の一つ一つを拾っては読み捨て捨ては読み捨てを繰り返す。読んだ資料は地面に置いてしまうので一分もすれば覇神の周りはプリントだらけになることだろう。

「これがWAXAが誇るPGMか」

彼が読んでいるのは先日手に入れたPGM キングPGMの解析結果だ。電脳獣を失った彼は、今やこのPGMも戦力の一つとして計算している。あのミスター・キングが作ったといわれるそのPGMを見て、さぞや至高の代物だと思つたのだが

「それでもないな」

あっさりとそういい捨てた。

「穴がありすぎるな。効率が悪いつて言うか、なんていうか。ノイズの吸収の仕方とかももっといい方法があるだろうに。その無駄を省けば能力麵にも余裕が空いて、新しい力が付け加えられるな」

ぶつぶつと呟きながら資料を流し読み。これをさつきから彼は5時間行っている。けれど資料はとうに読み終えていた。覇神は今三週目に回っている。それなのに何故読む必要があるのだろうか？

「……………使えないな。面倒だよ本当に。もつと便利かと思ったんだけどなあ。……………所詮敗北者の作ったPGMか。あゝあ、せつかく残留電波を集めてやったのは僕だったのにさ」

思わず天を仰ぐ。天井は高く、ざつと一メートルくらいあるだろうか。こんなに天井は高い必要などないのだが、前社長の趣味でこうなってしまうらしい。つくづく駄目な父親だな、と思いながら溜め息。

「有効なカードだと思ったんだけどなあ。やっぱりオリヒメも開放するべきだったかなあ。……………ヨイリーとキングとなら最高のPGMを作れるはずなんだけど」

期待は出来なかった。キングPGMでさえ覇神の満足で行く作品ではなかった。ここにオリヒメが加わったところで何の意味もないことは覇神は知っていた。

『そう溜め息をつく時間があるのなら、俺は外に出ていいか?』

彼のハンターからうんざりとしたような声が響く。もちろん覇神のウィザードだ。彼とそのウィザードは2年前からの付き合いだが、未だ友人関係とはいえない真柄だ。

「おいおい、一応僕だって社長だよ？　ここを襲われたら誰が僕を守るって言うのさ」

『なんのための警備ウィザードだ』

「ヘイト辺りの連中が来たら打つ手がない。所詮警備ウィザードなんて飾りだよ」

『よく言ったものだ。サテラポリスの戦力の4倍には匹敵するんじゃないのか、あれ』

それはあつてはならないことだった。国を守るはずであるサテラポリスより、ただの会社が戦力を有するなど、言語道断もいいことだ。

国が管理するサテラポリスとは違い、会社である覇神コーポレーションはどこにでも関係を作ることが出来てしまう。そうすれば武器の売買などが多方面で可能となり、最悪紛争が起きてしまうこともある。

なので会社がそんなに戦力を持ってしまふことなどあつてはいけない。それも国の4倍に匹敵するものなど。

「悪いけどサテラポリスが弱すぎるよ。あれって、ただ税金を受け取るために入隊した奴らだけだろ？　そんな奴らが作ったウィザード、強いわけがない。実際ヘイトくらいの奴なら消し炭にされて終わりだよ」

『だが、このウィザードは一応足止めくらいにはなるのだろう?』

「総動員すれば、ね」

覇神一人が生き残る時間は稼げる試算になっている。この建物にはどこから侵入してこようが、警備ウィザードが現れて守護する。簡単に言えばこのウィザードはどこにでも巡回しているのだ。今覇神がいる部屋にも数体は武器を手にいつでも交戦出来るようになっており、敵が現れればすぐさま戦うことだろう。

しかもたちの悪いことに、このウィザードには『色がない』。光学迷彩といえば分かりやすいだろうか、彼らは透明人間のように隠れ、現れた敵の背後に回り迎撃する。周波数を微調整にすることにより周波数で居場所を悟られることもなくなる。完璧な守りだ。

『なら別にいいだろう？ おまえのハンターにいるのは退屈なんだ。さっさと外に出せ』

「今ここが敵に攻撃されているとしても？」

少しだけ笑みを浮かべる。もちろん覇神は自身のウィザードが気づいていることは百も承知だ。けれどあえて聞いた。

しかし覇神はそういうものの異常などどこにも見当たらなかった。建物のどこかが貫通されたとか、社員が謎の侵入者にやられたなどということはない。いたっていつも通りだ。

『知っているさ、だから出せといっている。敵がいるのならさっさと殺してやりたい』

「だから待てって。君がいなくなったらどうするんだよ。僕は死んでしまうだろう」

『警備ウィザードに任せておけ』

「だ・か・ら、その警備ウィザードが敵だったらどうするんだよ」

見えない部屋には何か異常が見当たるはずがない。異常は見えない敵だったのだから。

覇神もウィザードもこれが敵の策略であることは見抜いている。しかし数が多すぎる。あと1分もしないうちに警備ウィザードの全てがここに集まることだろう。

数として、ざっと500体。しかしその性能は桁違いにもほどがあった。おそらくあのロックマンが敵であるのなら4体で充分だろう。ギャラクシーキングがいない今の状態なら、それほどの戦力差だ。

ざとここには125体のロックマンがいると考えてくれればいい。それが全て覇神一人を狙っているのだ。

『知らん、勝手に死ね』

けれどウィザードは覇神を助けようなどとは思っていなかった。自分のオペレーターがいなくても彼自身に不利益があるわけではない。ただ利用し利用されるだけの関係。ならば別に覇神じゃなくてもいいのだ。

「嫌だよ、ここでは死ねないよ」

見えざる敵を軽く見ながら、覇神は薄く笑う。その笑みのどこにも不安などという感情は見当たらない。

「ここで死ぬなんて、つまらないじゃないか。せめて面白いところで死なせてくれよ」

『もし神がいるのなら、おまえをここで殺してくれるさ』

「安心しろって、僕が神さ」

軽口を叩きながらも現状を把握。もうここに全ての警備ウィザードはあつまった。覇神は少しでも動けば攻撃してきただろうが、動かないのなら集められるだけ集めようという考えだったらしい。

「僕がどんなに絶体絶命だろうが、死ぬことなんてあり得ない。そうだろう?」

『そんなわけがあるか』

「そこは乗れよ、つまらないな」

覇神がハンターを操作する。手馴れた手つきでエアディスプレイを自身の目の前に出現させ、何かするつもりだ。

だが、その前に警備ウィザードが動いた。

透明なそれは、本来不意打ちを目的とした体を無視し真っ向から覇神に襲い掛かった。500という数に物を言わせての物量作戦。

警備ウィザードの装備は剣や銃の、大まかに分けると二つに分類される。半分が剣、半分が銃というぐあいだ。けれど剣と銃の種類は一種類だけではない。

剣はクレイモアを模したものやロングソード、ハルペー、ナイフなどと様々な形をしている。銃にしてもそれは同じだ。スナイパーライフル、ミニミ、サブマシンガン、ショットガン、ハンドガンといった具合にどんなときにも対応できる装備で攻勢されている。

それが一瞬にして覇神を殺そうと飛び掛ってきたのだ。避けることなど無理に等しい。

透明の剣と銃口から噴き出る透明の弾丸は、第三者が見れば神様が行った刑とも思わせるほど凄惨に、しかし的確に覇神を殺してしまふことだろう。それほど圧倒的な攻撃。

だから、覇神は最初から避ける気などなかった。

「はい、ドカーン」

エアディスプレイをたった一度触った。それだけだ。

たった一回触っただけで見えない警備ウィザードの体は吹き飛ん

だ。

透明であるはずのウィザードは粒子をこれでもかと撒き散らす。体だけではなく剣や銃弾でさえ粒子とかし、覇神の部屋を埋め尽くそうとする。深夜の海に見える月光に照らし出される泡のようだった。

「はっはっは、見る。ウィザードがゴミだ」

おもしろおかしく笑う覇神の横顔に邪気などない。無論彼は敵に利用される可能性など考えていた。だからウィザードが操られようがすぐに対処できる。

「……………これを見せたかっただけなのか？」

「当たり前だろ？ 綺麗だろ、この景色」

徐々に消えていく粒子、意志のない生命体であってもその光景は哀愁を感じさせた。

「……………俺は外に行くぞ」

ハンターから飛び出したウィザードは覇神に目をあわせることなく地上100階から外に身を躍らせた。ウィザードであるから別に問題はないのだが、もう少し飛び出る方法を覇神は考えて欲しかった。おかげで窓が一つ割れた。

「まあ作り直せばいいんだけどね」

エアディスプレイを押せば元通り。ここに壊れてはいけないものなどない。また直せばいいのだから。

「……………さあてと、ようやくまた戦いが始まってきた」

その言葉を紡ぎだす度に覇神の心拍数は上がっていく。ようやくなのだ、彼が表舞台にたつて戦うことが出来るのが。今までは舞台裏で戦うしかなかった彼が、ようやく本気で戦える。

「さつさと見つけて来いよ？ 喧嘩売ってきたバカには、すぐに消してあげるんだから」

もうどこにいるかも分からないウィザードに、覇神は獰猛な笑みを浮かべながらそういった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4094v/>

蒼き流星 希望への架け橋

2011年11月29日23時50分発行